佐久市埋蔵文化財調査報告書第25集

枇杷坂(びわざか)遺跡群

上久保田向(かみくぼたむかい)Ⅳ

長野県佐久市琵琶坂上久保田向遺跡Ⅳ発掘調査報告書

1994.3

キグナス石油株式会社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書第25集

枇杷坂（びわざか）遺跡群

上久保田向（かみくぼたむかい）Ⅳ

長野県佐久市琵琶坂上久保田向遺跡Ⅳ発掘調査報告書

1994.3

キグナス石油株式会社
佐久市教育委員会

例　　言

1　本書は、1992年9月16日～1994年3月31日にわたって発掘調査、整理された長野県佐久市大字琵琶坂字上久保田向に所在する枇杷坂遺跡群上久保田向Ⅳ遺跡の報告書である。

2　本調査はキグナス石油株式会社のガソリンスタンド建設に伴う開発により、埋蔵文化財の破壊が余儀なくされたためのものである。

3　発掘調査は佐久市教育委員会埋蔵文化財課が担当した。

4　本書は森泉かよ子が編集・執筆した。

5　本遺跡の出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1　遺構の略称は次のとうりである。

　Ｈ－住居址　　Ｆ－掘立柱建物址　Ｄ－土坑　Ｍ－溝址　Ｐ－ピット

2　挿図の縮尺は次のとおりである。

　遺構－１／８０　カマド－１／４０　遺物－１／４　　一部異なる縮尺もあり。

3　挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを現す。

　遺構　地山断面－斜線　柱痕－砂目極細　粘土－点　焼土－砂目

　遺物　土器器面黒色処理－点　灰釉陶器－砂目極細

4　遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

5　土層・遺物胎土の色調は、１９８８年版『新版　標準土色帖』に基づいてしめした。

目　次

凡例

例言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

　第１節　発掘調査に至る動機……1

　第２節　調査の概要……2

　第３節　調査日誌……4

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……4

　第１節　自然環境……4

　第２節　歴史環境……4

第Ⅲ章　基本層序……5

第Ⅳ章　遺構と遺物……6

　第１節　竪穴住居址……6

　第２節　掘立柱建物址……21

　第３節　土坑……25

　第４節　ピット群……29

　第５節　溝状遺構……29

第Ⅴ章　まとめ……30

引用参考文献

上久保田向遺跡Ⅳ地区遺構一覧表

上久保田向遺跡Ⅳ地区遺物一覧表

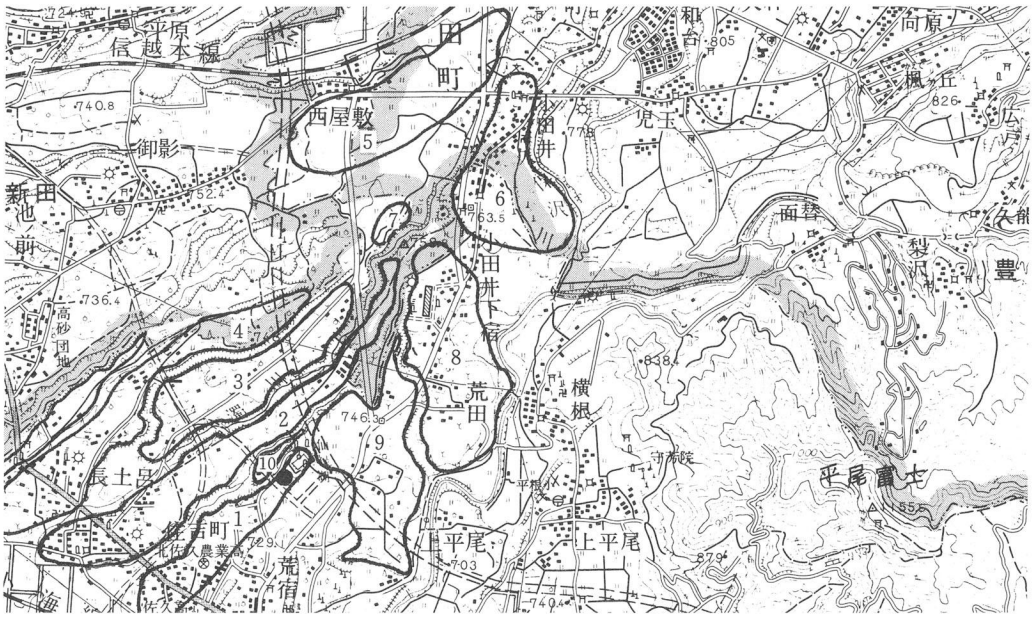
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

上久保田向遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓の末端部にあたり、南西方向にのびる田切り地形の台地上にある。標高734～736mを測る。

本遺跡は、昭和62年度に上信越自動車道建設工事の仙禄湖インターのアクセス道路部分として調査され、平安時代の竪穴住居址が見つかっている（長野県埋文センター調査）。ついで、平成２年度の岩村田北部土地区画事業に伴う仙禄湖線・湖南線の道路工事に先だって発掘調査が実施され、「上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ」として竪穴住居址等が検出されている。

今回、平成４年になって仙禄湖に隣接してキグナス石油株式会社のガソリンスタンド建設の計画されたため、試掘調査したところ遺構が検出され、発掘調査が必要となった。キグナス石油株式会社の委託を受けた佐久市教育委員会が調査を実施することとなった。



●上久保田向遺跡Ⅳ　１．枇杷坂遺跡群　２．長土呂遺跡群（聖原遺跡）　３．芝宮遺跡群
４．周防畑遺跡群　５．鋳師屋遺跡群　６．中金井遺跡群　７．曾根城遺跡
８．跡坂遺跡群　９．栗毛坂遺跡群　10．曾根新城

第１図　上久保田向遺跡の位置図（１：50,000　国土地理院地形図より）

第２節　調査の概要

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群　上久保田向遺跡Ⅳ（ＢＫＫⅣ）

調査委託者　東京都中央区京橋２－９－２
　　キグナス石油株式会社

調査受託者　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向213他

調査期間　1992年９月16日～1994年３月31日

調査面積　約１２００㎡

調査組織　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教　育　長　大井　季夫

教育次長　奥原　秀雄

埋蔵文化財課長　上原　正秀

管理係長　桜井　牧子

埋蔵文化財係長　草間　芳行

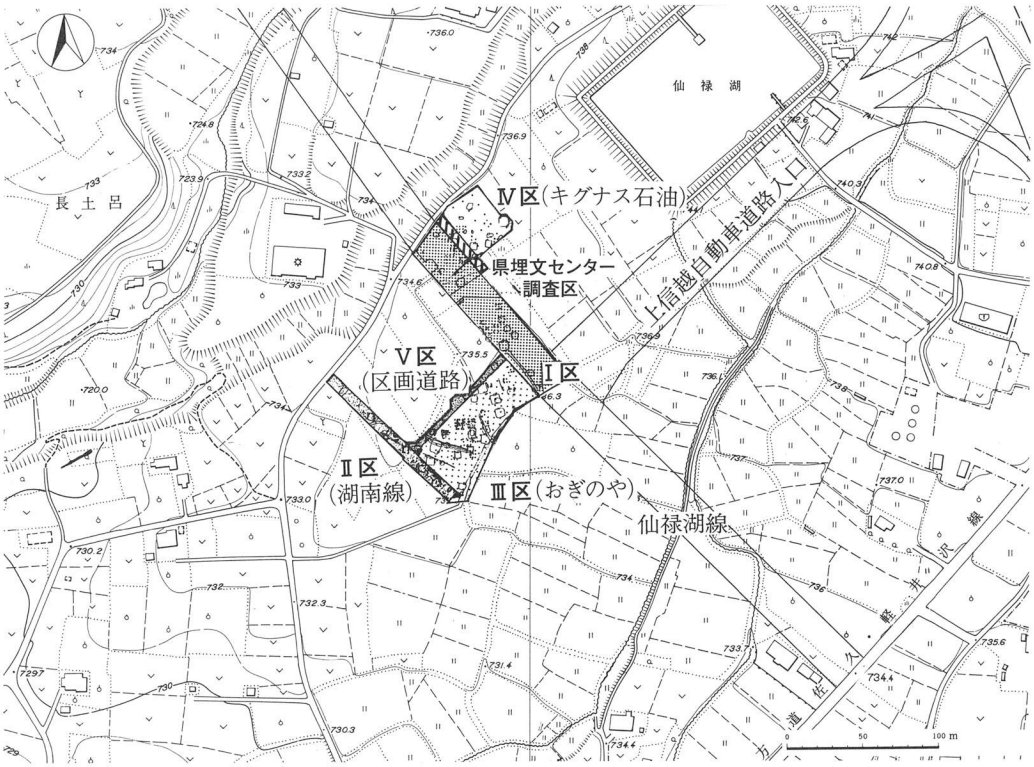
埋蔵文化財係　林　幸彦、高村　博文、三石　宗一、須藤　隆司、
　　小林　眞寿、羽毛田卓也

調査担当者　林　幸彦

調査主任　佐々木宗昭・森泉かよ子

調　査　員　池田　豊子、市川　愛子、市川チイ子、岩下　吉代、岩下とも子、
　　岩下　文子、今井みさ子、工藤しず子、神津よしの、小須田サクエ、
　　重田　優、重田よし子、清水佐知子、武田　千里、武田まつ子、
　　橋詰　勝子、橋詰けさよ、花里八重子、花里よしの、堀込　成子、
　　桃井もとめ、柳沢登志子、柳沢千賀子、依田　福男

報告書作成分担　土器実測　橋詰　勝子
　　土器復元　小田川　栄、清水佐知子、角田　時、角田　良夫、
　　星野　良子、橋詰けさよ
　　図面修正　堀篭　滋子
　　トレース　篠原　昭子、茂木とよ子、柳沢千賀子、森泉かよ子



第２図　上久保田向遺跡地区発掘区設定図（1：5,000）

Ⅰ区　仙禄湖線道路工事に伴う調査

（平成元年）　竪穴住居址３棟、掘立柱建物址５棟、溝状遺構３本

（平成２年）　竪穴住居址６棟、掘立柱建物址４棟、溝状遺構１本

（平成４年）　竪穴住居址１棟、掘立柱建物址２棟、溝状遺構２本、土坑３基

Ⅱ区　湖南線道路工事に伴う調査

（平成２年）　竪穴住居址２棟、掘立柱建物址３棟、土坑１基

（平成４年）　竪穴住居址２棟、掘立柱建物址３棟、溝状遺構４本、

Ⅲ区　おぎのやドライブイン建設工事に伴う調査

（平成４年）　竪穴住居址17棟、掘立柱建物址21棟、溝状遺構４本、土坑７基

Ⅳ区　キグナス石油株式会社ガソリンスタンド建設工事に伴う調査（本報告書）

（平成４年）　竪穴住居址６棟、掘立柱建物址６棟、溝状遺構１本、土坑７基

Ⅴ区　土地区画事業区画道路に伴う調査

（平成３年）　竪穴住居址１棟

（平成４年）　竪穴住居址４棟、掘立柱建物址４棟、溝状遺構３本

長野県埋蔵文化財センター調査区　上信越自動車道アクセス道路部分

（昭和63年）　竪穴住居址３棟、掘立柱建物址１棟、溝状遺構４

第３節　調査日誌

1992. 6. 18～20

重機による表土剝ぎ、遺構プラン確認。

9. 16

機材の搬入

9. 17～10. 7

本日より現場に調査員が入る。

遺構の検出、掘り下げ、実測作業。

記録的な少雨のため乾燥し、散水しながらの作業となる。

10. 8

現地における作業を終了。機材撤収。

1992. 12～1994. 3

遺物の洗浄，注記，図面修正等に着手。

土器の復元，土器の実測，トレース、遺物の写真撮影等を行い、報告書の編集、原稿の執筆をして刊行する。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境（第１図）

浅間山の噴出物である降下火山灰砂が堆積し、生活地表面をなしている地質範囲のため、水の侵食を受け流出し易く、田切り地形が発達している。台地上には集落を中心とした遺跡が分布し、田切りは浅間山山麓の湧水の流下流路となって、濁川をはじめとして標高750m以下の稲田耕作を支えてきたと考えられる。（1990・白倉盛男）

第２節　歴史環境（第１図）

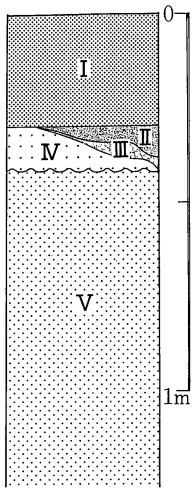
本遺跡の周囲は上信越自動車道が開通し、佐久インターが当地に設けられたことにより開発が盛んな地域である。また遺跡の分布は第１図に記載してあるように、台地の全面に分布している所である。すぐ北の台地には聖原遺跡があり、佐久流通業務団地造成事業に先だって発掘調査されることになり、平成４年現在までの４年間にわたり７万㎡以上の調査が進み、竪穴住居址799棟、掘立柱建物址663棟等を検出している。古墳から平安時代にかけての大集落であり、細長

い台地上全面に広がっている。さらに北の台地に芝宮遺跡があるが、やはり同様の集落が広がっている。さらに北の小田井地区にある鋳師屋遺跡群は、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落であるが、多数の馬骨の出土から、『延喜式』にある御牧・塩野牧、東山道長倉駅に関わった人々の集落ではないかという遺跡である（1985　堤　隆）。

当枇杷坂遺跡群の南には弥生時代後期の集落の清水田遺跡・上直路遺跡があり、東隣には周防畑Ｂ遺跡があり、弥生時代後期・奈良・平安時代の集落である。

本遺跡の北側には古墳中期の以降の集落が展開し、南側には弥生時代後期の集落も見られる。しかし、上久保田向遺跡の周辺では弥生・古墳時代の遺構は検出されず、平安時代まで開発されなかった地域であると言える。

第Ⅲ章　基本層序



第Ⅰ層　黒褐色土（耕作土）（１０ＹＲ２／３）

第Ⅱ層　黒色土（１０ＹＲ２／１）
　　粒子細かい緻密土

第Ⅲ層　暗褐色土（１０ＹＲ３／３）～褐色土（１０ＹＲ４／６）
　　５㎜～１㎝大のパミス粒含む。

第Ⅳ層　黄褐色土（１０ＹＲ５／６）
　　５㎜～１㎝大のパミス粒を多量含む。

第Ⅴ層　明黄褐色土（１０ＹＲ７／６）
　　パミスⅣ層より少ない。

（第Ⅳ・Ⅴ層　浅間軽石流層）

第２図　基本層序模式図

第Ⅱ層の黒色土は低所に堆積しており、その下層は影響されてローム層がくすんでいる。遺構は耕作土除去下で検出され、第Ⅱ層～第Ⅳ層上面でプラン確認できた。しかし、遺構の掘り込みが浅いため明確なプランがわからなかったものもある。所有者が機材置き場に使用していたことから、重機による撹乱が数カ所にみられた。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

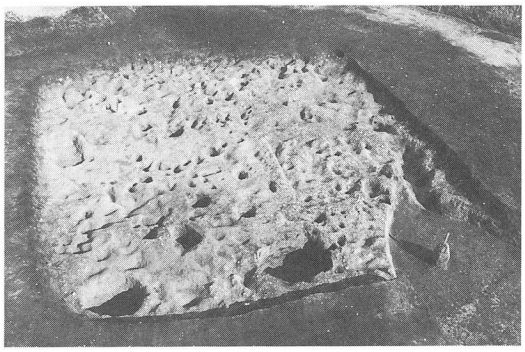
１）　第１２号住居址

遺構（第４・５図，写１～４）

本住居址は調査区東端中央にあり、遺構検出面は基本層序第Ⅱ・Ⅲ層の黒色土ないし暗褐色土層面である。６棟の中で最も大きい住居址である。東壁は第５号土坑を切り、南西隅は重機により深い撹乱をうけている。

床面で南北６ｍ、東西６ｍの隅丸方形を呈し、ほぼ真北に主軸をもっている。検出面からの壁高は10㎝と浅い。覆土は、黒褐色土が堆積し、床面はロームを主体として一部黒色土を混入した土で非常に堅く叩き締められていた。南側床面上には８ヶ所の焼けた床範囲があった。壁下には周溝が巡っている。主柱穴と思われピットは４ｍ四方の位置に東に２穴、西に２穴ずつ計４穴配され、径20～24㎝、深さ40～50㎝の柱根が残っていた。南壁下中央には出入り口の施設に関すると思われる小ピットが２穴ある。またそれほど堅く締まっていないものの貼床された床下土坑が、

写１　第12号住居址全景（西方より）



写２　第12号住居址掘り方

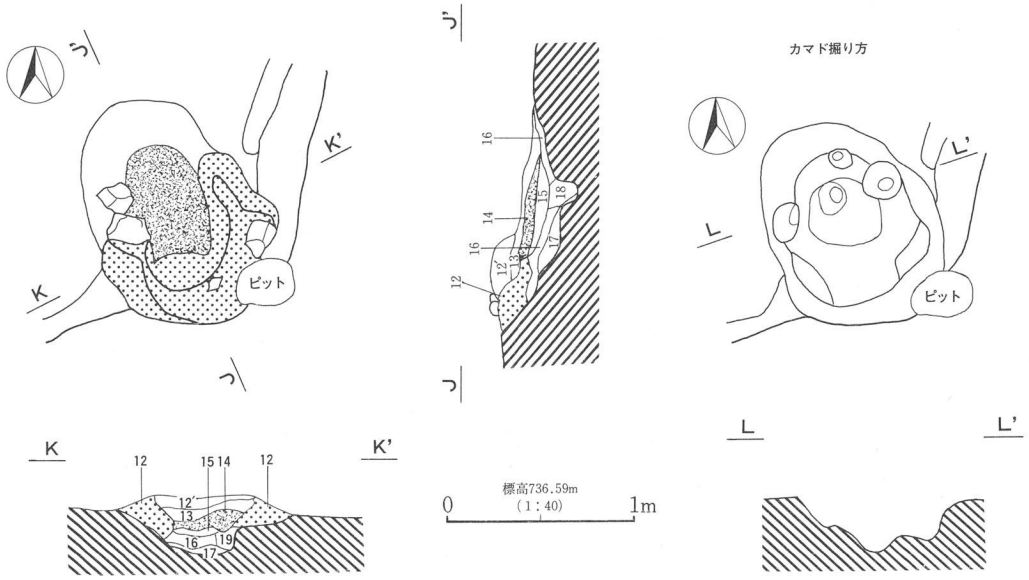
第12号住居址土層説明

1．黒褐色土（10ＹＲ２／２）
　５㎜大のパミス粒含む。
2．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　ローム粒子を多く含む。
3．暗褐色土（10ＹＲ３／３）
　パリパリの堅い貼り床。黒色土とロームの混入土。
　床面上数ヶ所の焼けた痕あり。
4．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　ローム粒子、パミス５㎜大含む。しまりなし柱痕。
5．暗褐色土（10ＹＲ３／３）
　ローム粒子多く含みしまりなし。
6．褐色土（10ＹＲ４／４）
　しまりあまりなし。
7．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　フカフカしまりなし柱痕。
8．暗褐色土（10ＹＲ３／３）
　フカフカしまりなし柱痕。
9．暗褐色土（10ＹＲ３／３）
　ローム粒子多く含む。
10．褐色土（10ＹＲ４／６）
　黄褐色ロームに帯状の褐色土層あり。しまりなし。
11．にぶい黄橙色土（10ＹＲ６／３）
　ローム。

第４図　第12号住居址実測図

西壁中央下と北西隅にある。ほぼ円形で径80㎝・90㎝、深さ50㎝を測る。北壁下にも長楕円形の床下土坑がある。床面下からも柱穴が７穴、主柱穴より南東寄って内側に見つかっており、この住居址が拡張された状況を示している。

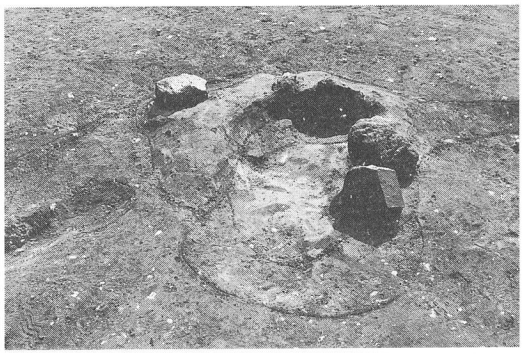
カマドは南東隅に設けられ、石（安山岩）を芯材にいれ粘土で構築しており、カマドの焚き口・天井はすでになく、付け根と奥壁部が残っていた。付近には羽釜の破片があった。掘り方の規模で長さ140㎝、幅90㎝を測る。



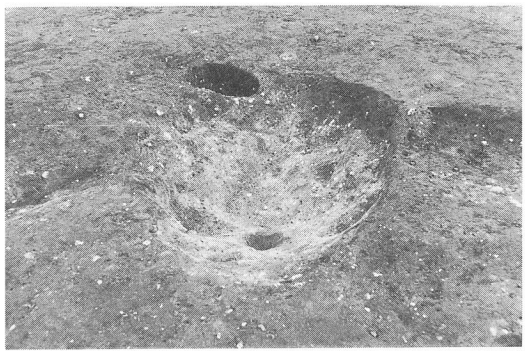
第12住居址カマド土層説明

12. 褐色土（7.5ＹＲ４／３）粘土層。
　暗褐色土（7.5ＹＲ３／３）も混入。12'はカマド天井崩落土。
13. 暗褐色土（10ＹＲ３／３）
　焼土、灰、炭化物粒子を多く含む。
14. 明褐色土（7.5ＹＲ５／６）
　焼土と灰層。
15. 明褐色土（7.5ＹＲ５／８）
　ロームが焼けている。人為埋土。
16～17. 褐色土（10ＹＲ４／４）人為埋土。
　６層には褐灰色土（10ＹＲ６／１）含む。
18. 暗褐色土（10ＹＲ３／３）人為埋土。
19. 褐色土（10ＹＲ４／４）

第５図　第12号住居址カマド実測図



写３　第12号住居址カマド

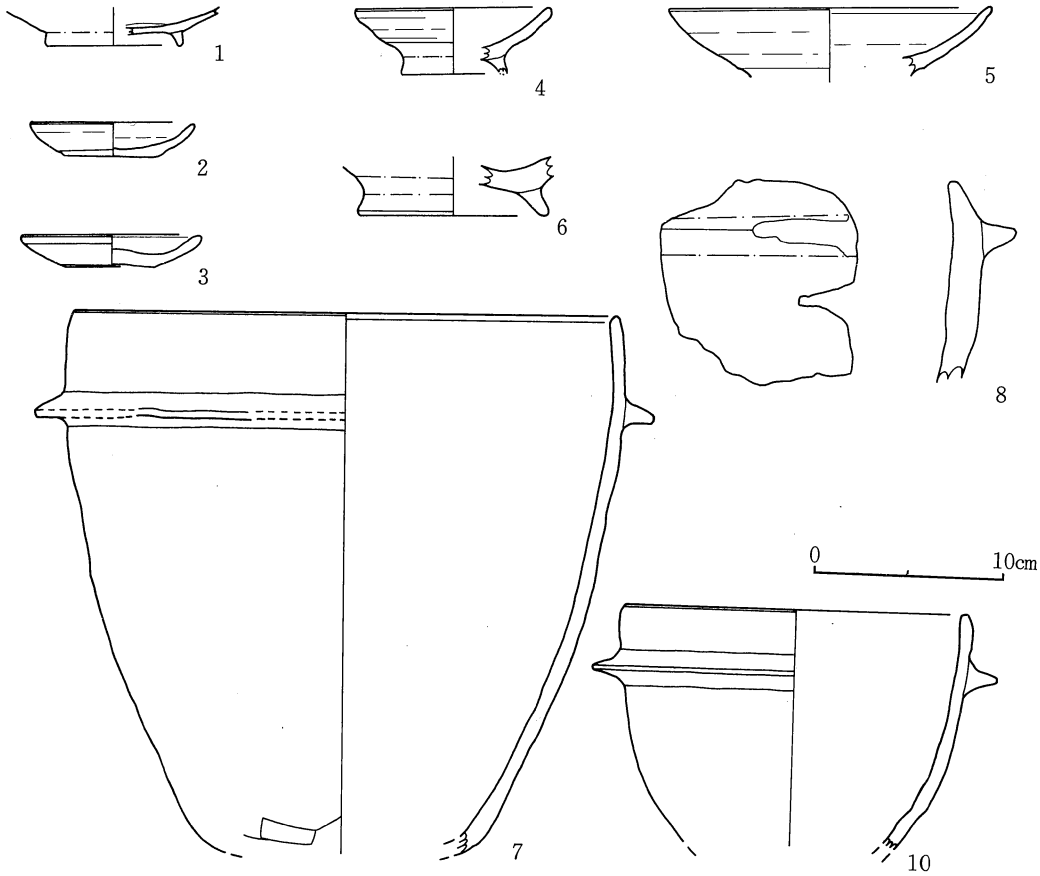


写４　第12号住居址カマド掘り方

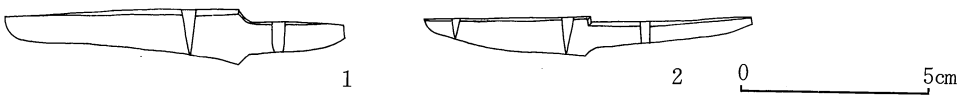
遺物（第６・７図）

本址からは、平安時代に作られた土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品が出土している。　灰釉陶器は皿１点のみあり、全体に細身で、断面三日月形の高台が付き、施釉されている。土師器は小皿、高台の付く小椀、大椀、厚手と薄手の羽釜がある。小皿・椀の胎土は粉末質の細密土で土師質土器である。須恵器には図示できないが、直線的な胴下部に低い高台の付く長頸壷片がある。混入品と思われる土師器「コ」の字形口縁甕の胴部片と軟質須恵器杯片もある。これらより本住居址の帰属する時期は11世紀後半であろうと思われる。

鉄製品は長さ9.0cm（７－１）と8.6cm（７－２）の刀子が出土している。



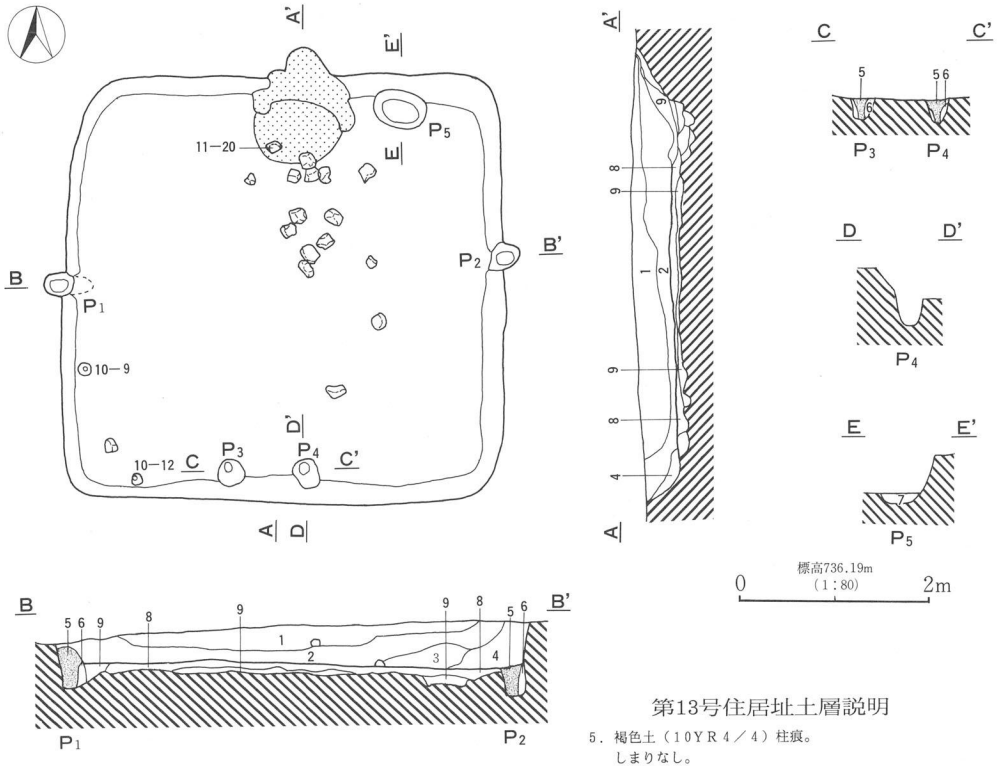
第６図　第12号住居址出土土器実測図



第７図　第12号住居址出土鉄製品実測図

2）　第１３号住居址

遺構（第８・９図，写５～７）



1．黒褐色土（10YR２／３）
細かいパミス粒子多い。
2．暗褐色土（10YR３／３）
ローム粒子、細かいパミス粒多い。
3．暗褐色土（10YR３／３）
２層に黒褐色土（10YR２／２）を含む。
4．褐色土（10YR４／６）
ローム主体。

第13号住居址土層説明

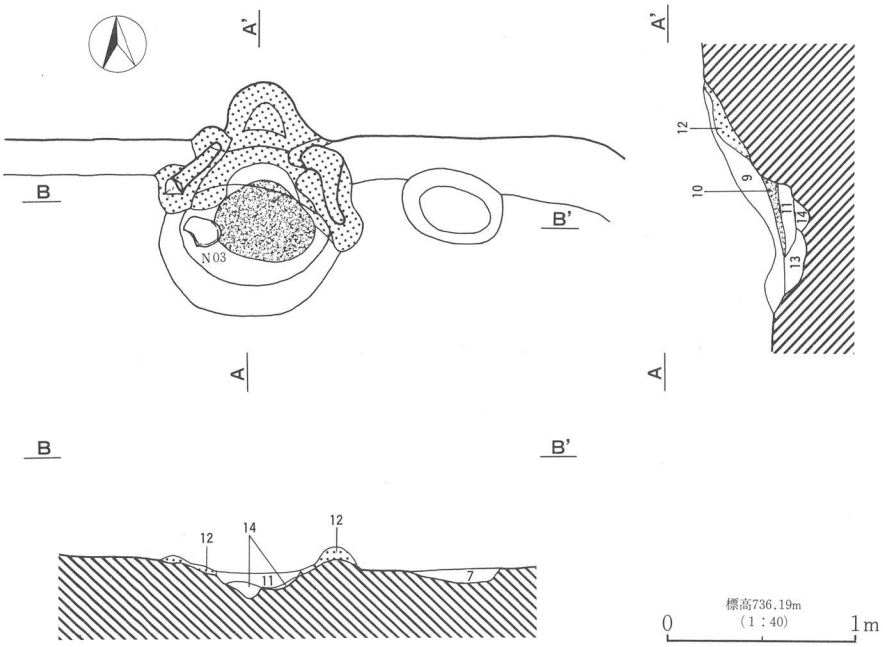
5．褐色土（10YR４／４）柱痕。
しまりなし。
6．褐色土（10YR４／６）
ローム粒子を多量に含む。
7．暗褐色土（10YR３／３）
焼土、炭化物粒子多量含む。粘性あり。（P５）
8．黒褐色土（10YR２／３）
非常に堅く、叩きしめられている。貼り床。
9．褐色土（10YR４／４）
黄褐色ロームをブロックで多く含む。

第８図　第13号住居址実測図

写５　第13号住居址遺物出土状況

調査区南西隅の第Ⅱ・Ⅲ層面で検出された。第17号掘立柱建物址を切っている。大方はローム層を掘り込んでいるが東壁側は風倒木の痕に構築している。規模は床面で南北4.1m、東西4.1mの方形を呈し、深さ55㎝を測る。主軸は真北をさしている。覆土は４層からなり、自然堆積である。

床面は黒色土・ロームを混入した土で貼り床され、叩き締められている。



第13号住居址カマド土層説明

9．黒褐色土（10YR２／３）
まれに焼土粒を含む。

10．暗赤褐色土（５YR３／３）
焼土と灰を多量に含む。

11．明赤褐色土（５YR５／８）
人為埋土のロームが良く焼けている。

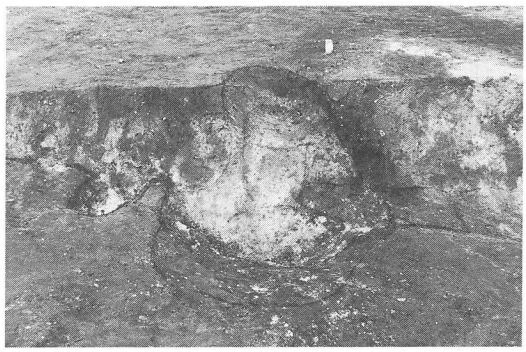
12．暗褐色土（10YR３／３）
にぶい黄褐色粘土（10YR４／３）を多く含む。

13．暗赤褐色土（５YR３／２）
焼土粒・粘土粒子含む。人為埋土。

14．暗褐色土（7.5YR３／３）
焼土粒子含む。人為埋土。

第９図　第13号住居址カマド実測図

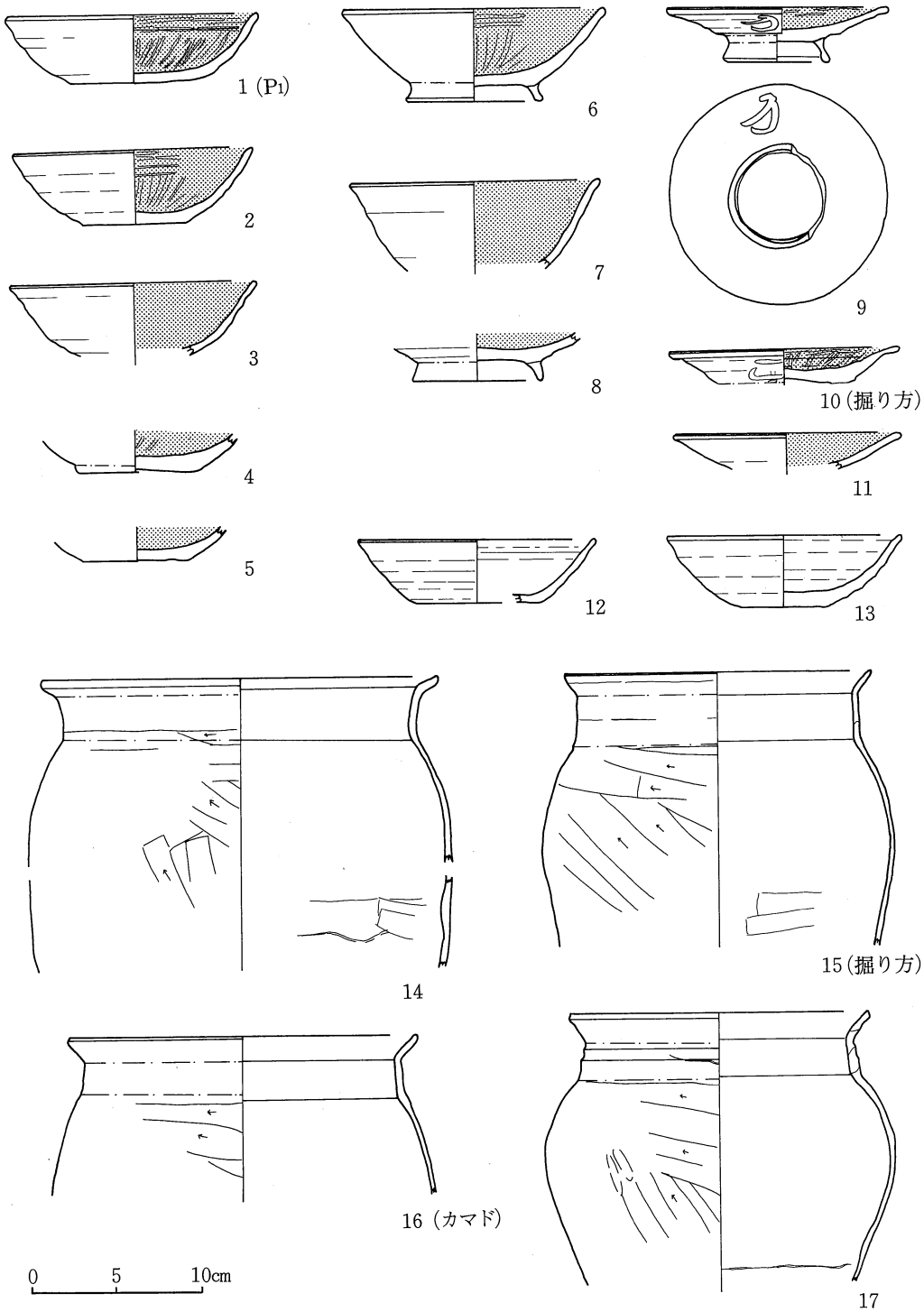
写６　第13号住居址カマド



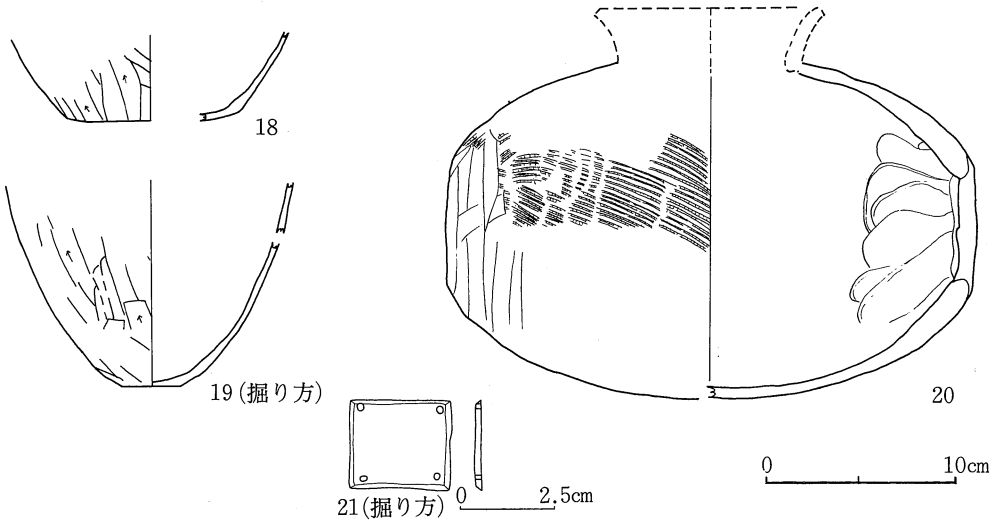
写７　第13号住居址カマド掘り方

床面下は、壁より内周して幅１ｍの周溝状にⅣ層ロームが20㎝程掘り込まれ、ロームを主体とした土で埋められている。柱穴は東西両壁の中央に２穴設けられ、柱痕は径16㎝、深さ（床面から）30㎝を測る。南壁下には出入口施設のピットが２ヶある。

カマドは北壁中央にあり、天井部は壊されてなく、両袖の付け根部分が残っていた。煙道部は



第10図　第13号住居址出土土器実測図（1）



第11図　第13号住居址出土土器実測図（２）

壁より30㎝程突出しておりカマドの大きさは長さ60㎝、幅50㎝を測る。カマドの袖には芯材として石（安山岩）を入れ粘土で構築しており、石の抜けた痕跡や床面には焼けた石があった。煙道部下面にも粘土が貼られている。

カマドの東には長径26㎝深さ17㎝の楕円形の浅いピットがあり、焼土・灰を含むいわゆる「灰落とし」ピットがあった。

遺物（10・11図）

本址からは平安時代の土師器・須恵器・青銅製巡方の裏側止めが出土している。

土師器は杯・椀・皿の食膳具と甕の煮沸具がある。杯・椀・皿類は内面にミガキを施し、黒色処理している。１の杯は底部ヘラケズリがなされているが、他は回転糸切りのままである。９は「万」の墨書があり、10にも墨書があるが判読できない。10はカマド焚き口前の貼り床下から出土している。１はＰ１柱穴の掘り方から出土している。甕は４個体あり、いずれもいわゆる「武蔵型甕」で、「コ」の字形の口縁形を呈し、胴部上半は横、中・下部は斜めのヘラケズリを施すものである。19は台付き甕であろうか。使用していたと思われるのは14･16･17の甕で、15･19は掘り方から出土している。

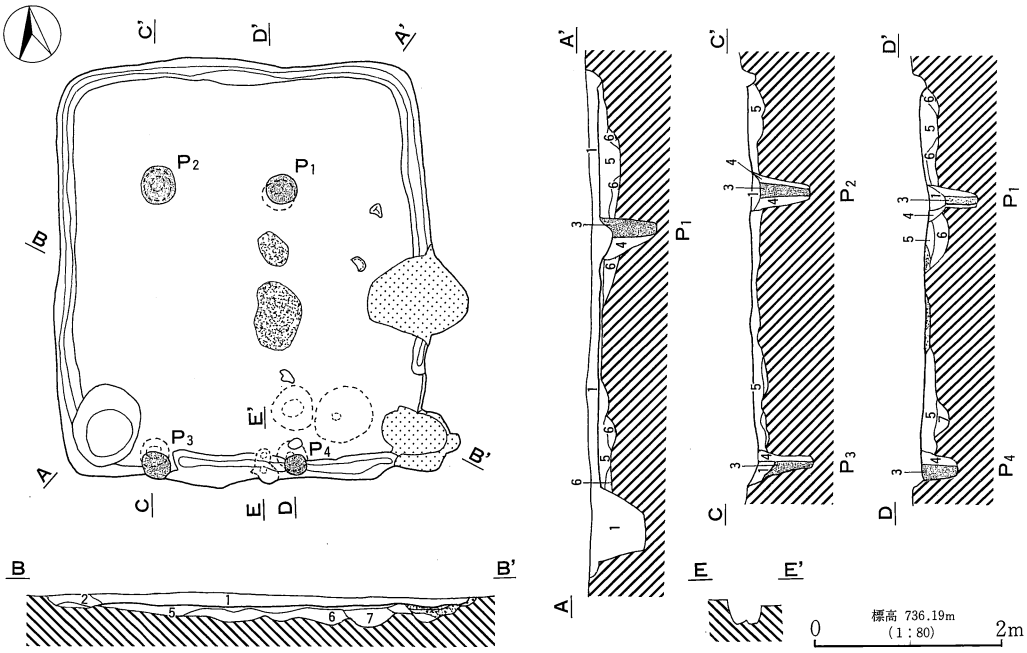
須恵器は軟質須恵杯・横瓶がある。杯は底部回転糸切りのままである。

これらより掘り方から出土しているものがやや古い様相を持っているが９世紀後半に位置ずけられる土器群である。

青銅製巡方の裏側は、2.6㎝×2.2㎝の長方形で厚さ約１㎜を測る。四隅に径１㎜の穴あり。

3） 第１４号住居址

遺構（第12･13図，写８～12）



第14号住居址土層説明

1．黒褐色土（10ＹＲ２／２）
まれにパミス粒・ローム粒子含む。
2．黒褐色土（10ＹＲ３／２）
ローム粒子混入する。
3．暗褐色土（10ＹＲ３／４）
柱痕、フカフカでまるでしまりなし。
4．褐色土（10ＹＲ４／４）
黄褐色ロームに黒色を含む。
5．暗褐色土（10ＹＲ３／４）貼り床。
黒色土とローム混入土。
6．黄褐色土（10ＹＲ５／６）
ロームを埋めている。
7．暗褐色土（7.5ＹＲ３／３）
灰・粘土を多く含む。

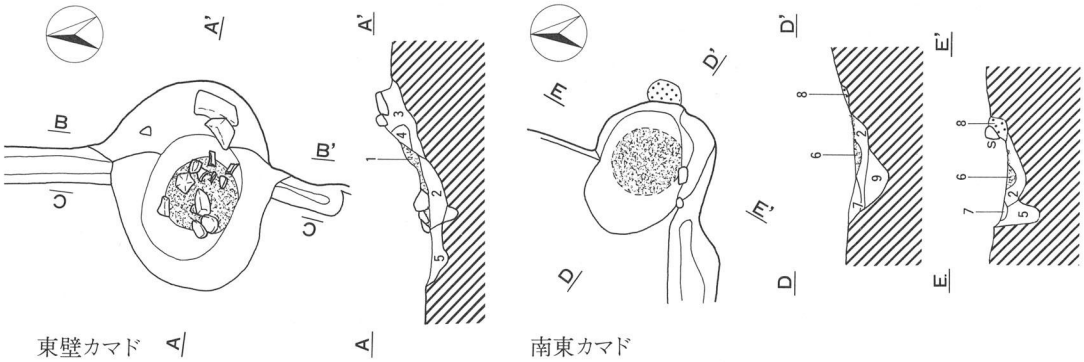
第12図　第14号住居址実測図

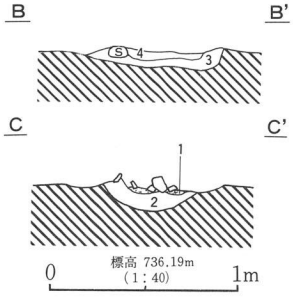
調査区の南端にあり、近くに第13･15号住居址がある。基本層序第Ⅱ・Ⅲ層面で検出された。

規模は、床面で南北4.0m、東西3.6mを測り、南北に長い長方形を呈する。検出面から床までの深さは８㎝と浅い。覆土は、黒褐色土で自然堆積である。床面は黒色土とロームの混入土で堅く叩き締められていた。二ヶ所床面が焼けていた。床下は周辺部のローム16㎝程余分に掘り窪められ埋められていた。

主柱穴は、北側床面と南壁中に４本あり、径20㎝程の柱痕が残っていた。

カマドは南東隅と東壁中央よりやや南に２基あった。２基は同時に使用されたものと思われる。東壁カマドは基部と火床面が残るのみで、奥壁は40㎝出て、長さ110㎝幅90㎝を測る。南東隅のカマドは壁より50㎝程出て設けられ、奥壁の粘土と焚き口火床面が残っていた。火床面はよく焼けていた。南東隅カマドの西側の床下には灰・粘土を含む落ち込みがあった。

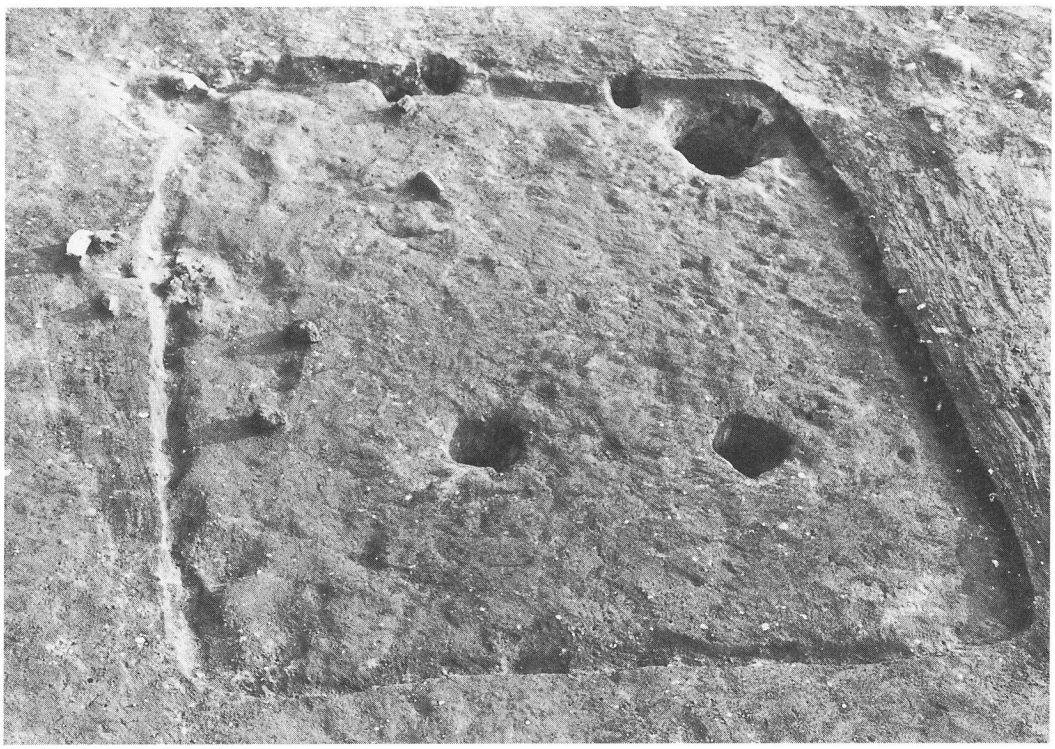




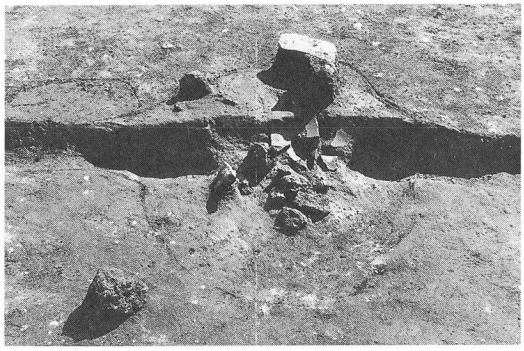
第14号住居址カマド土層説明

1. 褐色土（7.5YR4／4）
   灰層。
2. 明褐色土（7.5YR5／8）
   焼土層、人為埋土のロームが焼けた層か。
3. 黒褐色土（7.5YR2／2）
   にぶい褐色粘土粒を含む。
4. 褐色土（10YR4／4）
   焼土粒子含む。
5. 黄褐色土（10YR5／6）
   黒色土微量含む。
6. 暗褐色土（10YR3／3）
   灰、焼土を含む。
7. 明褐色土（7.5YR5／6）
   灰、焼土層。
8. 黒褐色土（7.5YR2／2）
   褐色（7.5YR4／4）の粘土を含む。
9. 褐色土（10YR4／4）
   褐灰色土を含む。

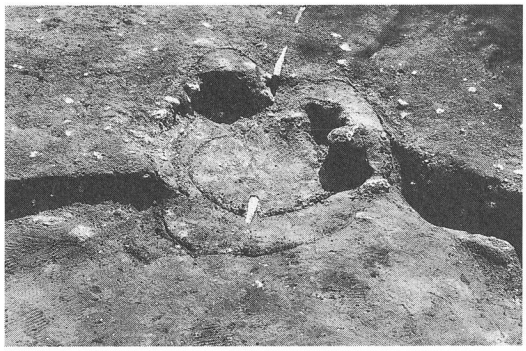
第13図　第14号住居址カマド実測図



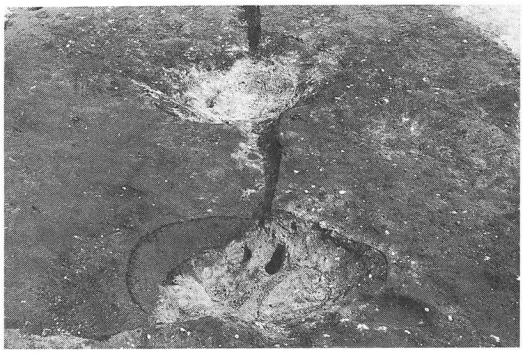
写8　第14号住居址全景（北方より）



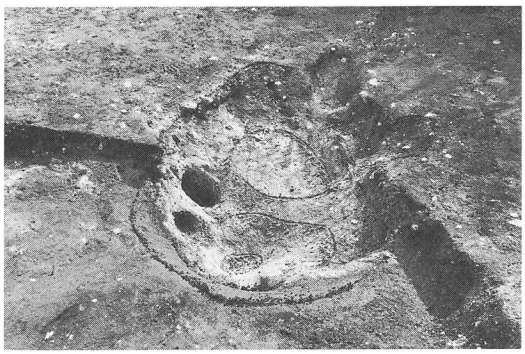
写９　第14号住居址東壁カマド



写10　第14号住居址南東カマド

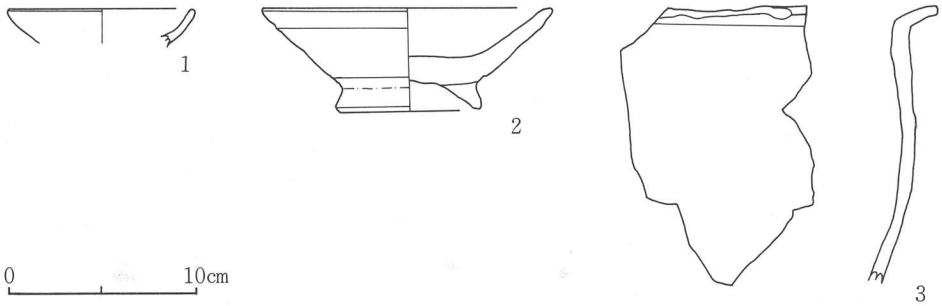


写11　二基のカマド掘り方



写12　南東カマド掘り方

遺物（第14図）



第14図　第14号住居址出土土器実測図

本址からは平安時代の土師器と須恵器が出土している。

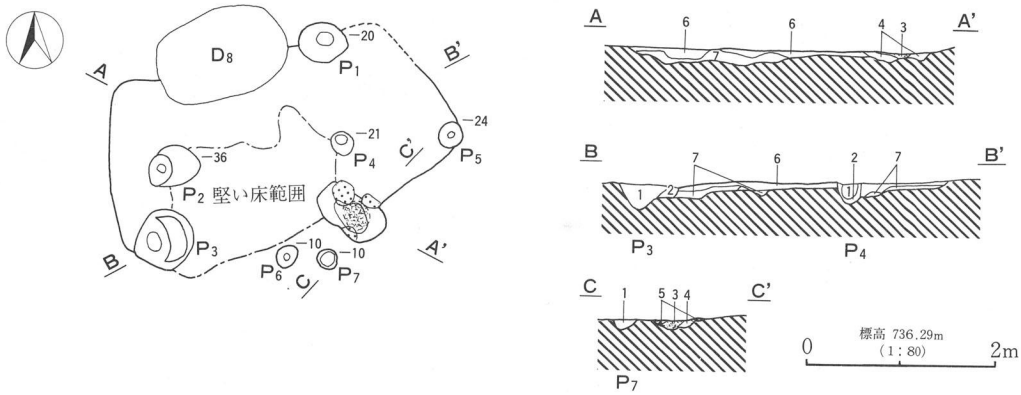
土師器は小皿・椀・甕・羽釜があり、小皿・椀類の胎土は粉末質の細かいもので土師質土器である。甕は口縁が直角に折れる厚手のもので、外面の調整はナデのみのものである。羽釜は比較的薄手のものである。甕・羽釜はカマドから出土している。

須恵器は杯蓋と長頸瓶の頸部片があるが混入品と思われる。

これらより１１世紀代と思われるが資料が少なくて断定できない。

4） 第１５号住居址

遺構（第15図，写13）



第１５号住居址土層説明

1．黒褐色土（10ＹＲ２／２）
　パミス粒子わずかに含む。
2．褐色土（10ＹＲ４／６）
　ローム粒子多い。
3．褐色土（7.5ＹＲ４／６）
　焼土層、上面に灰層わずかにあり。
4．暗褐色土（10ＹＲ３／４）
　ローム多く含む。
5．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）粘土を多く含む。
6．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　叩き締められた床。
7．黒褐色土（10ＹＲ２／３）
　１層より黒味が強い。掘り方の埋土。

第15図　第15号住居址実測図

写13　第15号住居址全景（北西より）

第14号住居址の北にあり、第Ⅲ層黒色土層中に構築したもので、カマドと思われる焼土範囲と堅く叩き締められた一部の床面範囲を検出した。しかし、壁はなく住居址全体のプランはつかむことができなかった。掘り方プランでは南北1.7m、東西3.2mの長方形に掘り窪められたが確実ではない。

ピットは掘り方範囲内に5穴、外に2穴検出した。P2・P4・P5は東西方向に、P1・P4・P7が南北方向に並んでおり、いずれも浅いものである。掘り込みを持つ竪穴住居とは性格の異なるものかもしれない。北側には第8号土坑があるが、本址に伴う可能性もある。

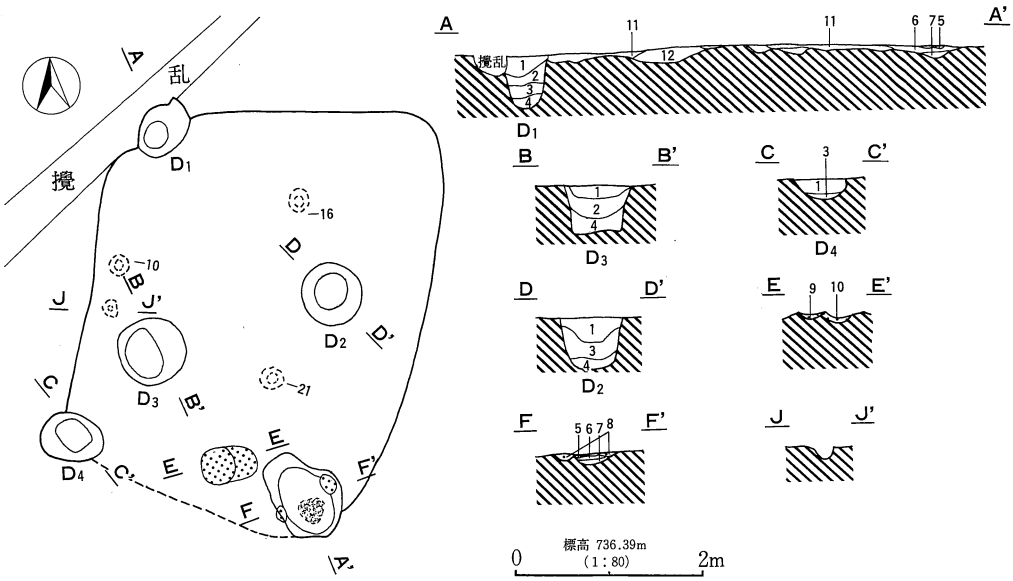
カマドと思われる粘土・焼土を伴う落ち込みは、推定される住居址範囲の南側中央にある。長さ76cm、幅50cmを測る。

遺物

検出時に羽釜の胴部片が出土し、断定はできないが平安時代11世紀代以降のものと思われる。

5） 第16号住居址

遺構（第16図，写14～16）



第16号住居址土層説明

1．黒褐色土（10YR2／2）
　パミス5㎜大とローム粒子わずかに含む。
2．暗褐色土（10YR3／3）
　ローム粒子、パミス粒子多く含む。
3．褐色土（10YR4／4）
　ロームに黒色土粒子を含む。
4．黄褐色土（10YR5／6）
　しまりのないローム。
5．赤褐色土（5YR4／8）
　焼土層
6．褐色土（7.5YR5／8）
　焼土粒子含む。
7．明褐色土（7.5YR5／8）
　ロームが焼けている。
8．黒褐色土（7.5YR2／2）
　粘土粒子（にぶい褐色）多く含む。
9．明赤褐色（2.5YR5／6）粘土と
　にぶい褐色（7.5YR5／4）粘土。
10．灰黄褐色（10YR4／2）
　粘土。
11．黒色土（10YR1.7／1）
　または黄褐色土（10YR5／6）を混入して貼ってある。掘り方
12．黄褐色土（10YR5／6）
　ロームがくすんでいる。

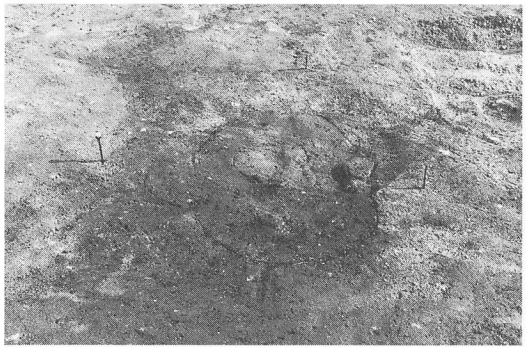
第16図　第16号住居址実測図

調査区の北側にあり、他の遺構とは離れている。第Ⅴ層で検出され、第Ⅴ層中に構築されている。この住居址も壁は残っておらずプランは明確ではない。北西隅は水道管によって切られている。床面も一部削られているが、黒色土とローム の混入土で、貼り床されている。

規模は長軸4.2m、短軸3.0mを測る。南北に長い不整な隅丸長方形プランと推定される。

柱穴と思われるものはわからなかったが、貯蔵用のピットであろうか径30～40㎝、深さ50㎝を測るものが３ヶある。（Ｄ１～Ｄ３）

カマドは住居址の南東隅にあり、わずかの焼土・粘土が残っていた。長さ１ｍ、幅72㎝を測る。カマド焚き口西の床面には粘土を貼りこんだ浅い落ち込みがあった。



写14　第16号住居址カマド

写15　第16号住居址カマド掘り方

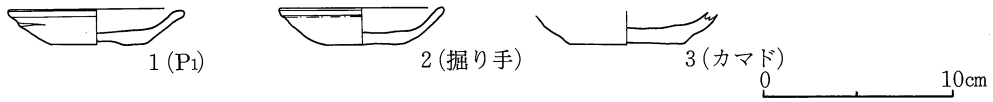
写16　第16号住居址全景（西方より）

遺物（第17図）

本址からは平安時代の土師器のみが出土している。

小皿・羽釜・甕がある。小皿は直線的に開くものである。胎土はきめ細かい土師質土器。羽釜は厚手で鍔の短いものである。甕は厚く、短い口縁が外方に折れ、外面に雑なミガキを施すものである。また、羽釜と思われるものの、鍔のないずんどうの大型品もある。

これらより11世紀後半〜12世紀の土器群に位置ずけられるものとおもわれる。



第17図　第16号住居址出土土器実測図

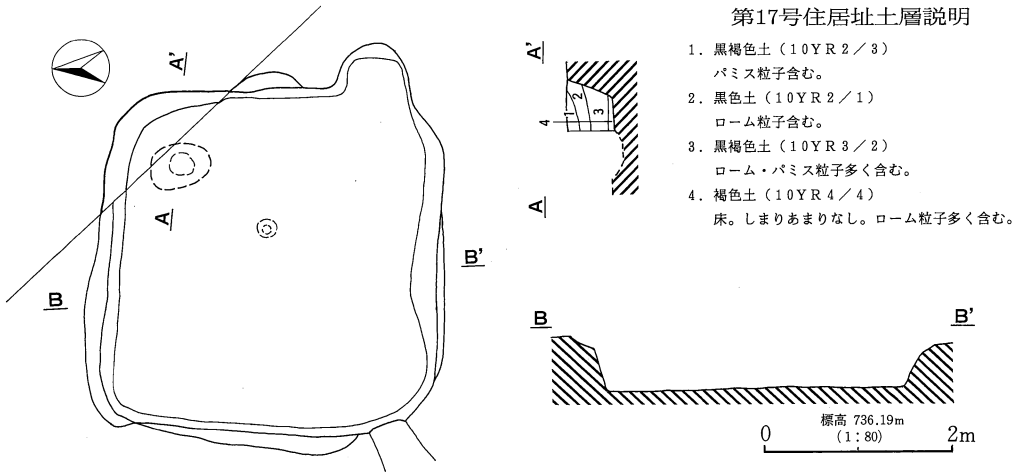
6）　第１７号住居址

遺構（第18図）（長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２』参照）

住居址の北東隅だけ調査した。他は長野県埋文センターが昭和63年に調査している。第２号溝と重複し、切られている。平面形は方形を呈し、南東隅が張り出す。規模は南北3.2m、東西3.4mをはかる。カマドは持たない可能性があるとしている。

遺物

須恵器と土師器が出土し、土師器は、内面ミガキ黒色処理した糸切り底の杯、薄手の胴部へラケズリした「武蔵型甕」がある。須恵器は軟質須恵の杯である。いずれも小片であるが、県センターでは実測された資料があり、９世紀第四四半期に位置づけている。

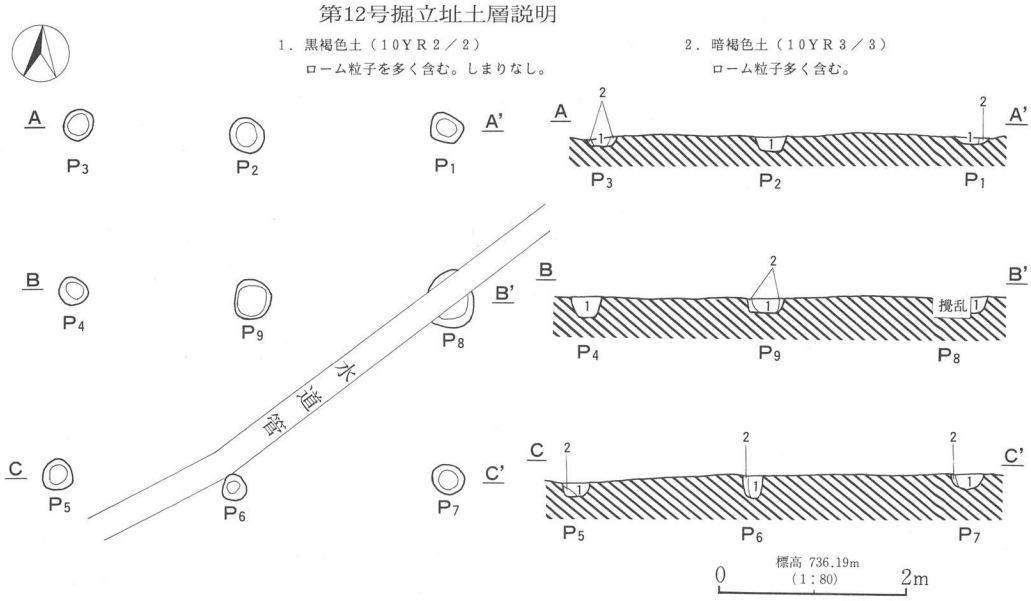


第18図　第17号住居址実測図

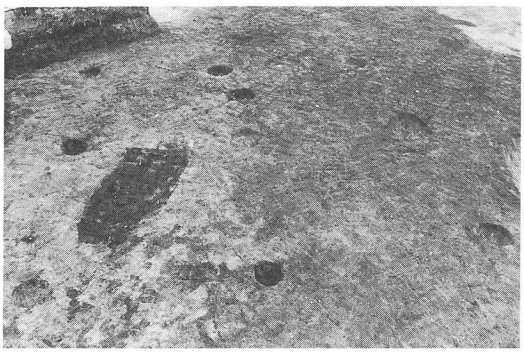
第２節　掘立柱建物址

１）第１２号掘立柱建物址（第21図，写19）

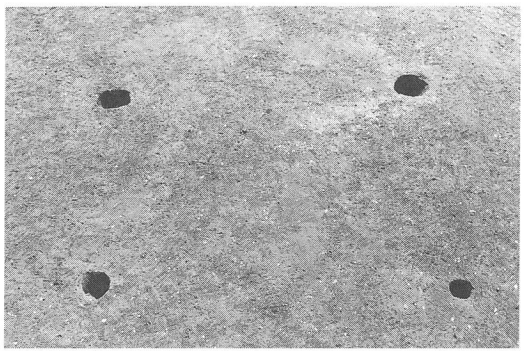
調査区東端中央にあり、東西２間×南北２間の総柱の掘立柱建物址である。桁行き4.0×梁行き3.7ｍを測る。柱穴は、円形で径30～50㎝深さ20～30㎝である。遺物もなく、重複関係もない事から、本址の帰属する時代は不明である。



第19図　第12号掘立柱建物址実測図



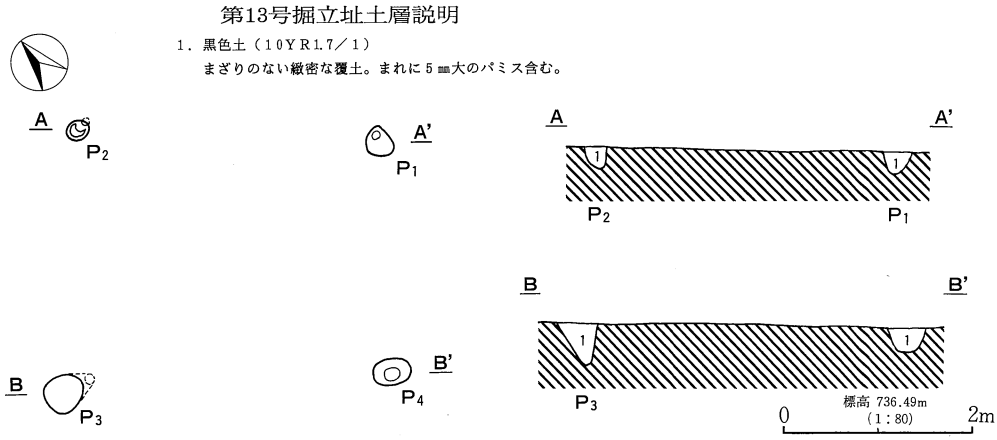
写17　第12号掘立柱建物址（南方より）



写18　第13号掘立柱建物址

２）　第１３号掘立柱建物址（第20図・写18）

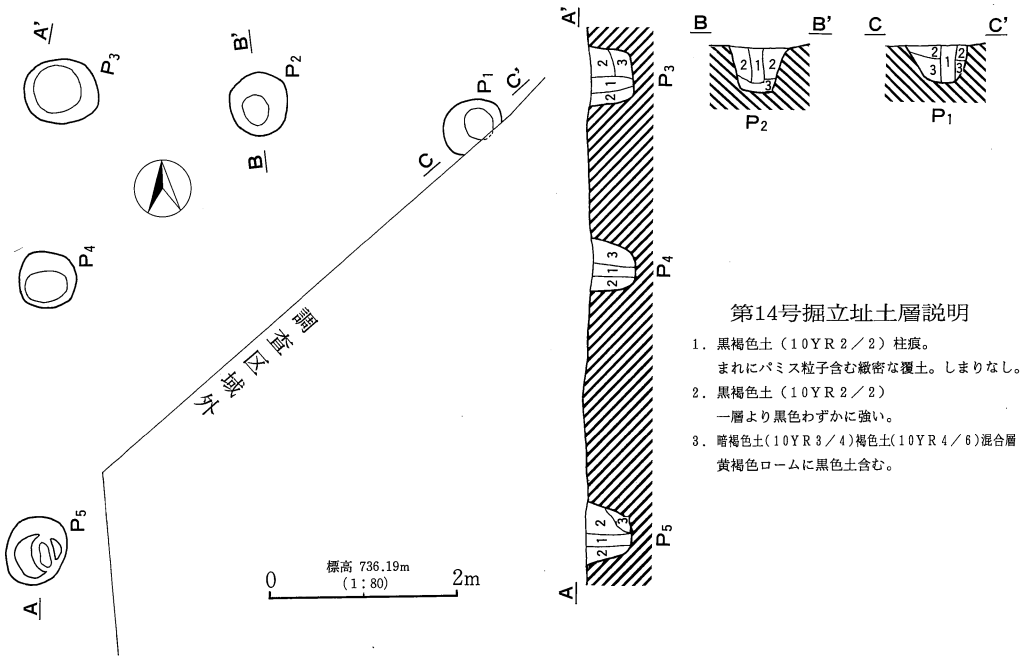
調査区東側中央の第Ⅳ層で検出された。東に第12号住居址がある。１間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、桁行き3.3ｍ、梁行き2.6ｍを測る。柱穴は35～40㎝の楕円形で、深さは浅いのは20㎝、Ｐ２・Ｐ３のピットは深く斜めに70㎝程入る。主軸は西に傾いている。遺物はなく、重複関係もない事から本址の時代は不明である。



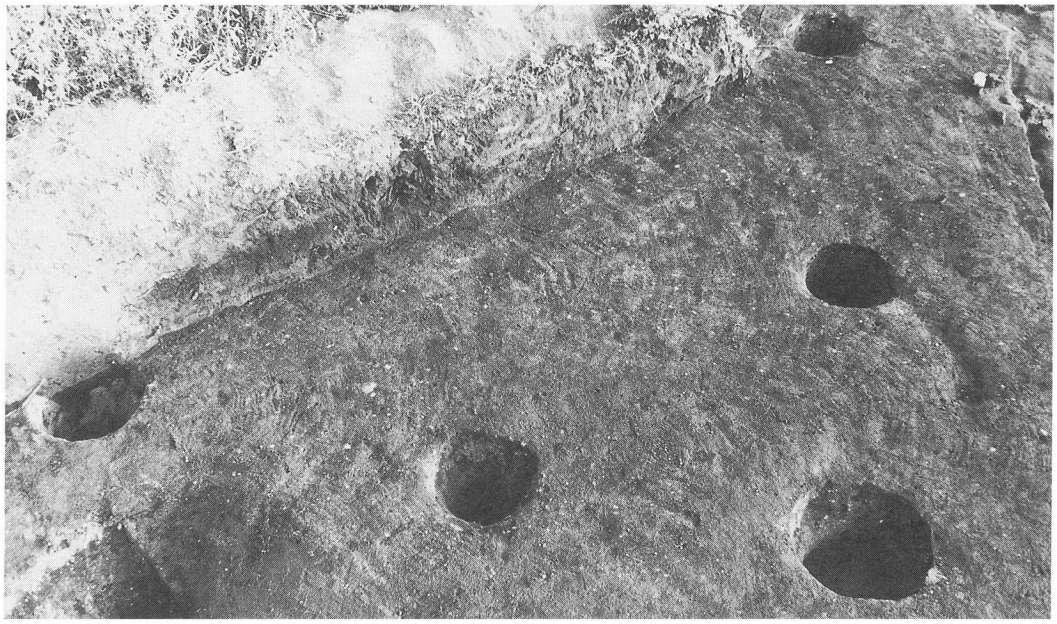
第20図　第13号掘立柱建物址実測図

3）　第１４号掘立柱建物址（第21図，写19）

調査区南端にあり、第Ⅱ層で検出された。南東側の柱穴は区域外で調査できなかった。西側には１m離れて第14号住居址、東に第15号住居址がある。北西で第４号土坑を切っている。桁行き5.0m、梁行き4.5mの２間×２間の側柱式の東西棟であろうと推定される。柱穴は円形で径60㎝、深さ40～50㎝を測る。柱根が推定でき径14～16㎝の円形である。遺物はなく、時代は不明である。

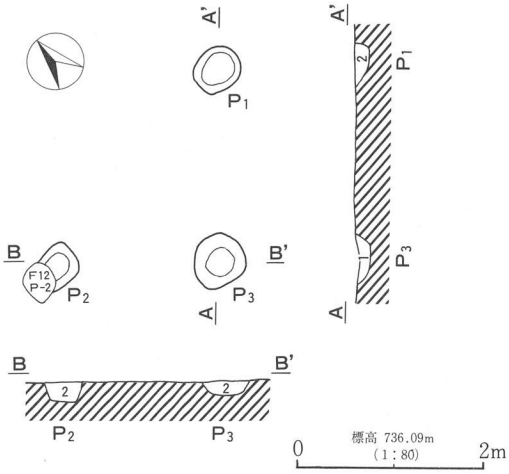


第21図　第14号掘立柱建物址実測図



写19　第14号掘立柱建物址（北方より）

4）　第１５号掘立柱建物址（第22図）



第22図　第15号掘立柱建物址実測図

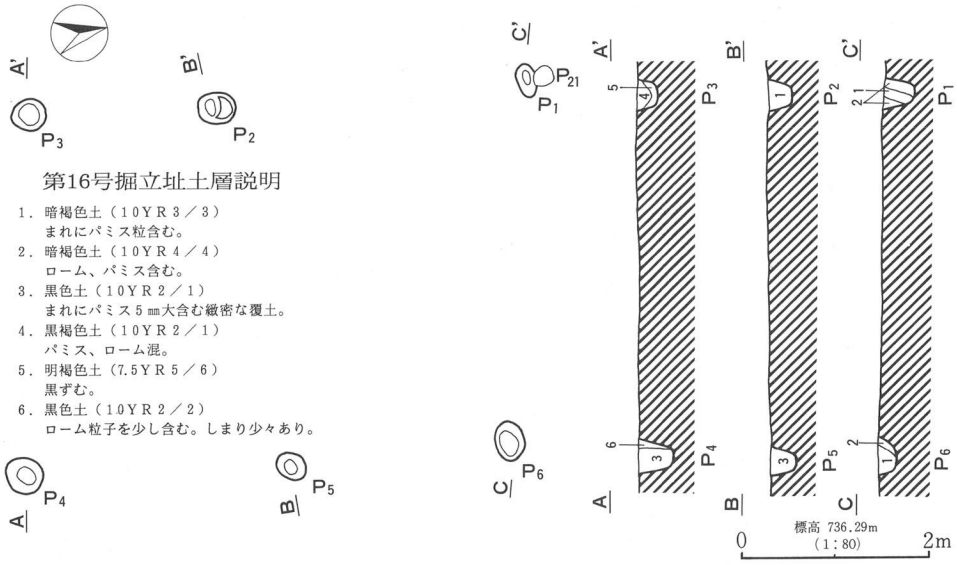
第15号掘立址土層説明

1．黒色土（10YR２／１）
　パミス含む。
2．黒褐色土（10YR２／３）
　パミス、ローム含む緻密土。

第16・17号掘立柱建物址の間にあって、１間×１間の側柱式掘立柱建物址と思われる。北の柱穴はわからなかった。桁行き2.0m、梁行き1.6mを測る。柱穴は不整円形で径50㎝、深さ14～20㎝を測る。第17号掘立柱建物址に切られているためそれ以前ということになる。

5）　第１６号掘立柱建物址（第23図，写20）

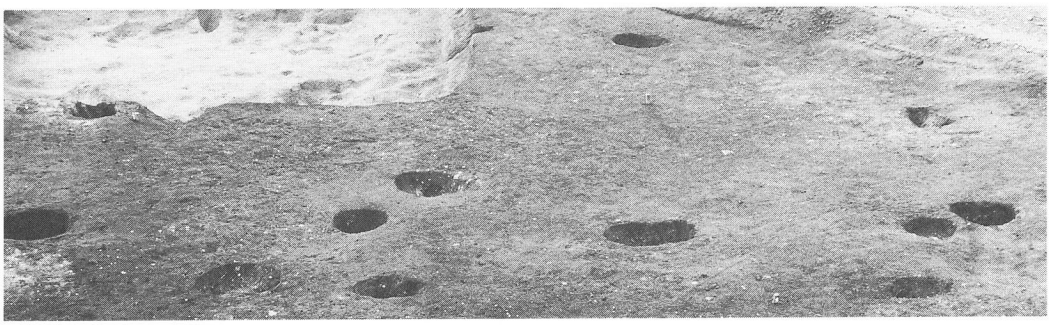
調査区東中央にあり、第17号掘立柱建物址に接している。第７号土坑が北東にあり、伴うものかもしれない。桁行き5.2m梁行き3.8mの２間×３間の東西棟の掘立柱建物址である。柱穴は長径30～40㎝の楕円形を呈し、深さ20～25㎝を測る。遺物はなく、時代は不明である。



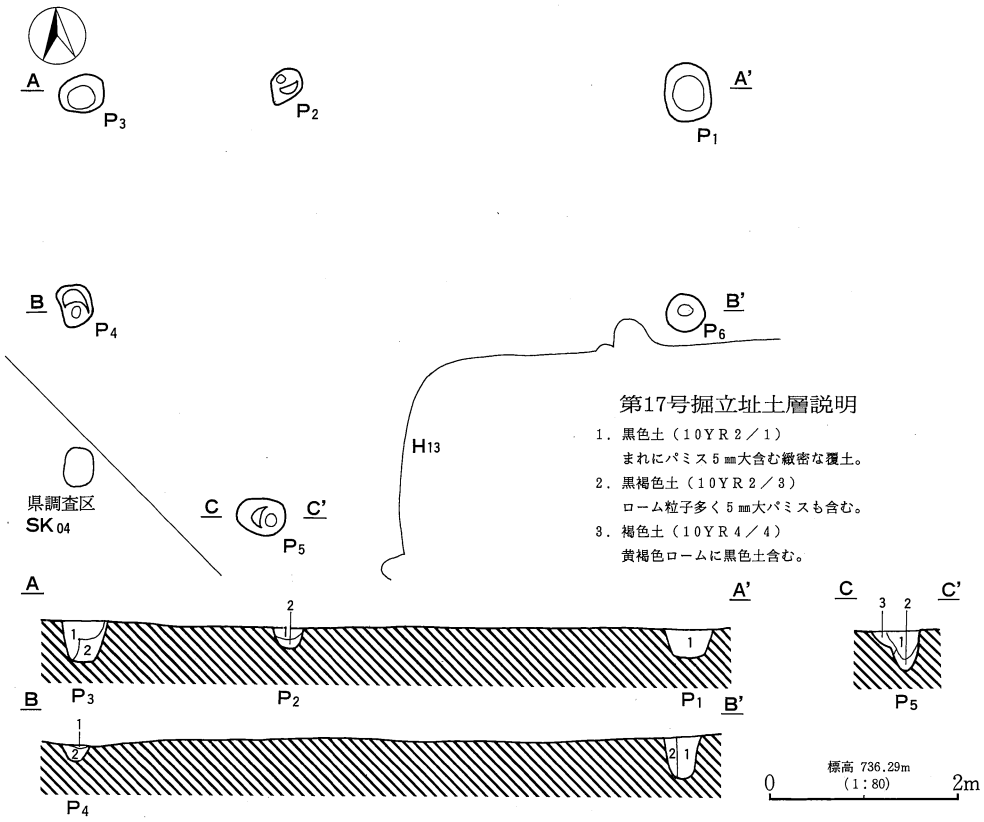
第23図　第16号掘立柱建物址実測図

写20　第16号掘立柱建物址全景（北方より）

6）　第１７号掘立柱建物址（第24図，写21）



写21　第17号掘立柱建物址全景（北方より）



第24図　第17号掘立柱建物址実測図

調査区南西区にあり、第13号住居址に南西隅柱穴を切られ、第15号掘立柱建物址を切っている。南西は長野県埋文センターの調査区域にあたり、ＳＫ04が検出されており本址の柱穴と思われる。桁行き6.4m、梁行き4.6m、２間×２間の側柱式の東西棟の掘立柱建物址である。柱穴は長径40～60㎝の楕円形を呈し、深さ20～60㎝を測る。遺物は出土していないが、９世紀代後半の遺物を出土する第13号住居址に切られており、それ以前の遺構である。

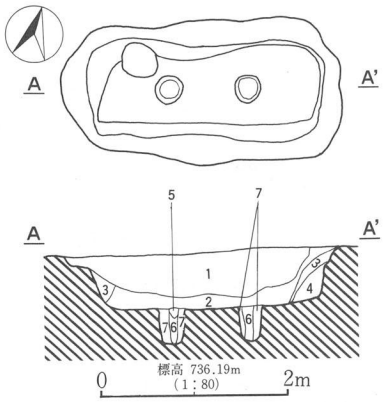
第３節　土坑

１）第２～第５号土坑（第25～28図，写22～24）

この４基の土坑は遺物は伴っていないが、縄文時代の狩猟用の「落し穴」と形態が一致しているため、縄文時代の土坑として扱う。

第２号土坑　長径2.9m、短径1.5mの長方形に近い楕円形で、深さ55㎝を測る。底面は平胆で、２本のピットがあり、径30㎝、深さ40㎝の穴を掘り、径８と12㎝の木杭をロームで埋めていたものと思われる。

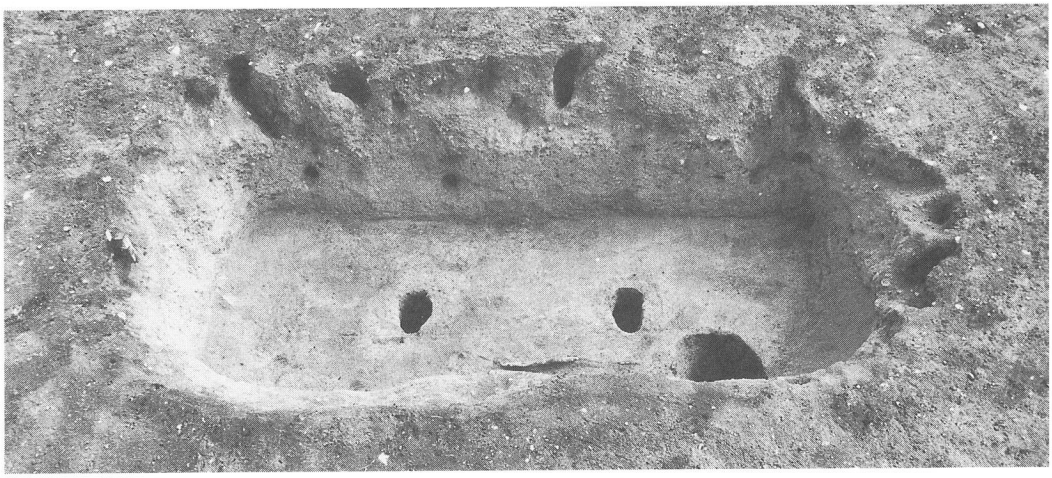
第３号土坑　長径2.6m、短径1.8mの楕円形の土坑で、深さ69㎝を測る。土坑底面にピットが３ヶあり、直接木杭を打ち込んだ跡があった。径16㎝程で深さ40・28・10㎝とまちまちである。



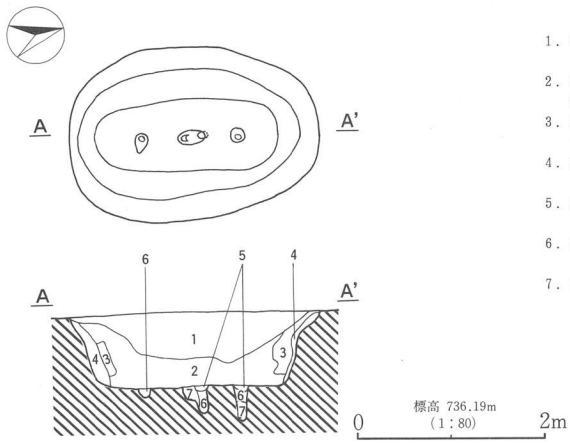
第 2 号土坑土層説明

1．黒色土（１０ＹＲ1.7／１）
　５㎜大のパミス粒を含む。
2．黒褐色土（１０ＹＲ２／２）
　黄褐色のローム粒子、パミス５㎜大多く含む。
3．暗褐色土（１０ＹＲ３／３）
　ローム多く含む。
4．黄褐色土（１０ＹＲ５／８）
　ローム。
5．黒色土（１０ＹＲ1.7／１）
　しまりあまりなし。
6．暗褐色土（１０ＹＲ３／３）
　ローム粒子含む。
7．にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／４）
　ローム。

第25図　第２号土坑実測図



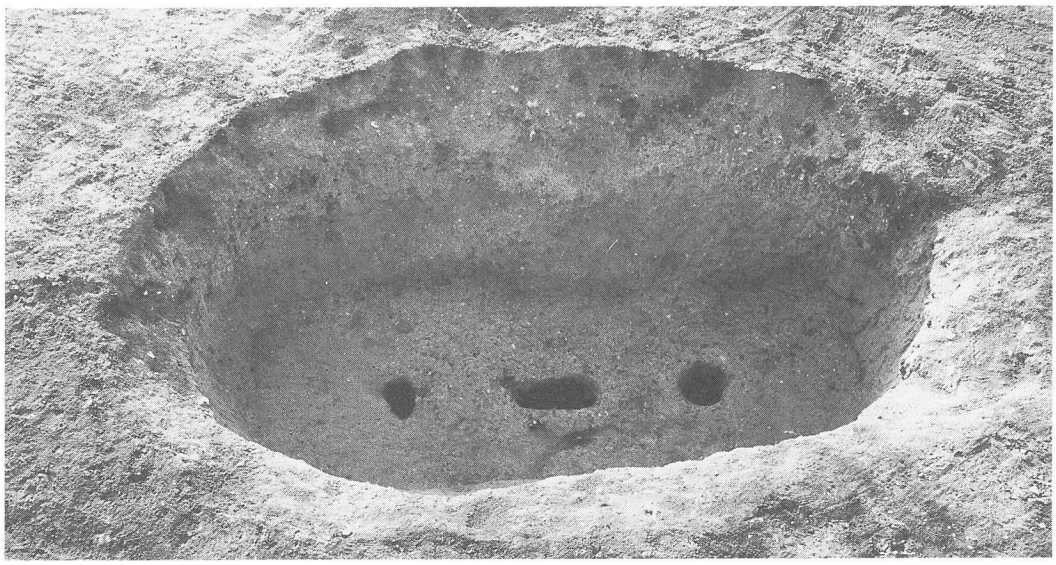
写22　第２号土坑全景



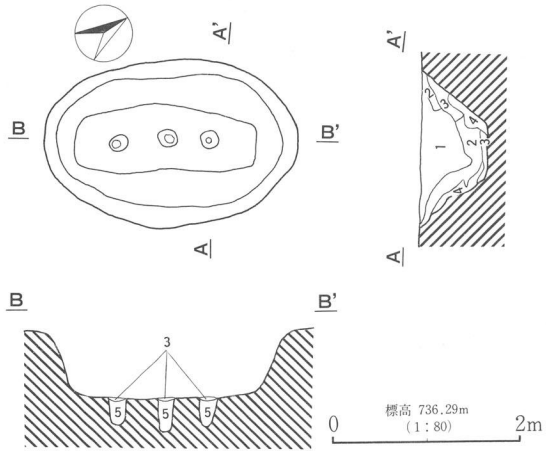
第 3 号土坑土層説明

1．黒色土（１０ＹＲ1.7／１）
　５㎜大のパミス粒を含む。
2．黒褐色土（１０ＹＲ２／２）
　黄褐色土のローム粒子、パミス５㎜大多く含む。
3．暗褐色土（１０ＹＲ３／３）
　ローム多く含む。
4．黄褐色土（１０ＹＲ５／８）
　ローム。
5．黒色土（１０ＹＲ1.7／１）
　しまりあまりなし。
6．暗褐色土（１０ＹＲ３／３）
　ローム粒子含む。
7．にぶい黄橙色（１０ＹＲ６／４）
　ローム。

第26図　第３号土坑実測図



写23　第３号土坑全景



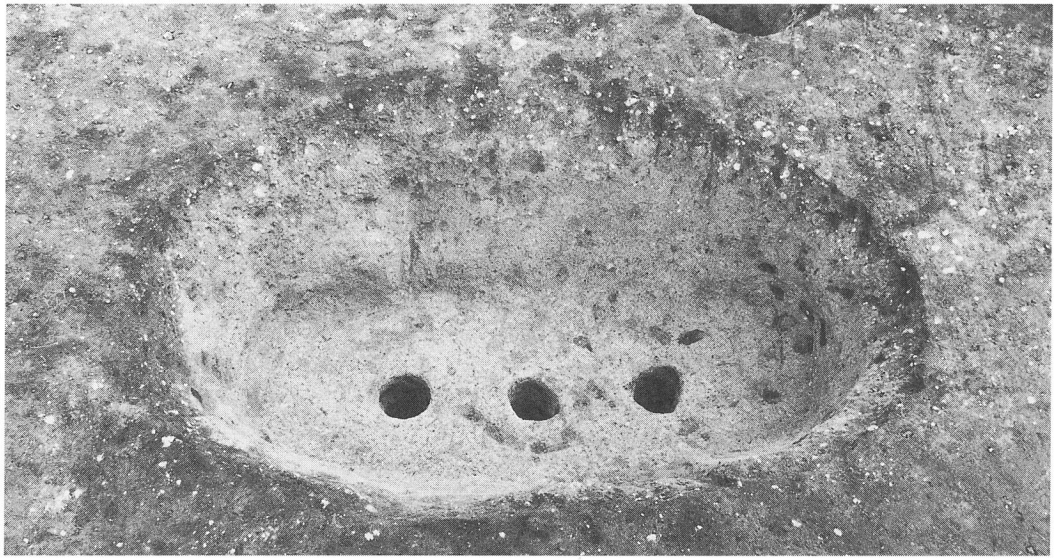
第４号土坑土層説明

1．黒色土（10YR1.7／1）
　５㎜大のパミス粒を含む。
2．黒褐色土（10YR２／２）
　黄褐色のローム粒子。
　パミス５㎜大多く含む。
3．暗褐色土（10YR３／３）
　ローム多く含む。
4．黄褐色土（10YR５／８）
　ローム。
5．褐色土（10YR４／４）
　ローム多く、しまりなし。

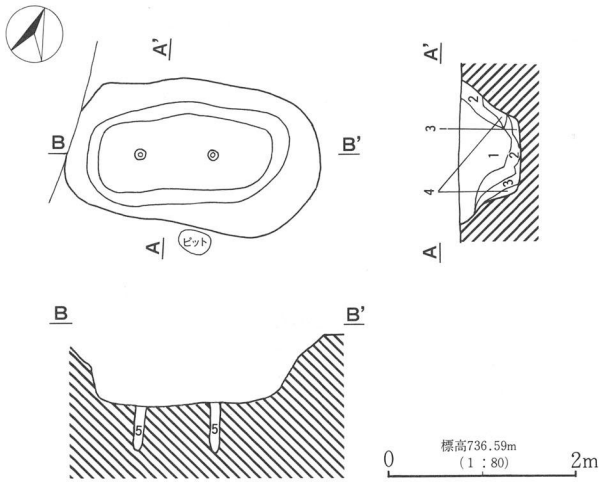
第27図　　第４号土坑実測図

第４号土坑　長径2.7m、短径1.8mの楕円形の土坑で、深さ72㎝を測る。土坑の平坦な底面にピットが３ヶあり、径20㎝程で深さ30㎝の穴に木杭を入れ、ロームで埋めている。木杭の径は12㎝である。

第５号土坑　長径2.7m、短径1.5mの楕円形の土坑で、深さ65㎝を測る。土坑の平坦な底面にピットが２ヶあり、直接木杭を打ち込んだ痕跡があった。径10㎝程で深さ48・52㎝と細長いものであった。



写24　第4号土坑全景

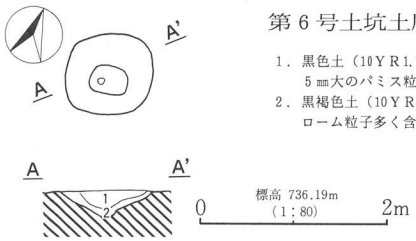


第5号土坑土層説明

1．黒色土（10YR1.7／1）
　5㎜大のパミス粒を含む。
2．黒褐色土（10YR2／2）
　黄褐色のローム粒子、パミス5㎜大多く含む。
3．暗褐色土（10YR3／3）
　ローム多く含む。
4．黄褐色土（10YR5／8）
　ローム。
5．暗褐色土（10YR3／3）

第28図　第5号土坑実測図

2）　第6号土坑（第29図）



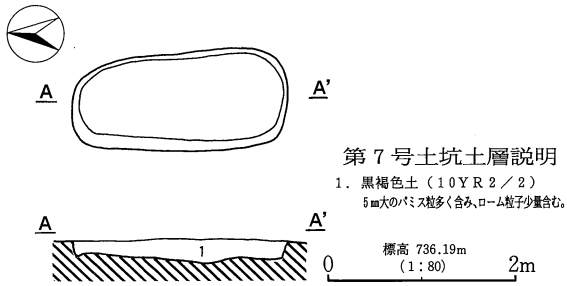
第6号土坑土層説明

1．黒色土（10YR1.7／1）
　5㎜大のパミス粒少量含む。
2．黒褐色土（10YR2／3）
　ローム粒子多く含む。

第29図　第6号土坑実測図

本址は調査区西の中央より北寄りで検出された。第12号掘立柱建物址が南にある。径90㎝の角張った円形を呈し、深さ30㎝を測る。底面は中央が一段下がっている。遺物はないが、覆土は縄文の土坑と同様であった。

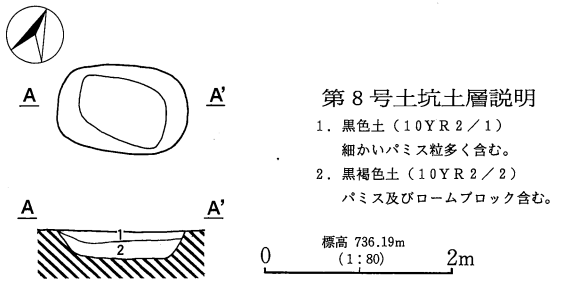
3） 第７号土坑（第30図）



第30図　第７号土坑実測図

本土坑は第17号掘立柱建物址の北東隅にある。長径2.2m、短径1.0mの長楕円形を呈し、深さは20㎝を測る。第17号掘立柱建物址との関係は明かではないが、伴う可能性もある。

4） 第８号土坑（第31図）



第31図　第８号土坑実測図

本土坑は調査区南中央に当たり、第15住居址を切っている。長径1.4m、短径0.9m、深さ31㎝を測り、楕円形を呈する。第15号住居址との関係は明かではないが、伴う可能性もある。

第４節　ピット群（全測図）

ピット群は調査区西側中央あたりに集中している。上面の遺構が削平されてしまったものもあると思われるが、遺構としては捉えられなかった。

第５節　溝状遺構（全測図）

１）第７号溝状遺構

本地点の溝状遺構は本址のみである。調査区南西隅で検出され、第17号住居址を切っている。幅20～30㎝、深さ５～10㎝の小溝である。西側に流出した様子があり西に徐々に幅広くなっていく。

第Ⅴ章　まとめ

縄文時代

土坑が５基あり、４基は落とし穴で長径2.6～2.9m、深さ55～72㎝の楕円形を呈する深いものである。底面に木杭の痕があり、掘り方を持ち木杭をロームで埋めているもの（Ｄ２・Ｄ４）と直接木杭を打ち込んでいるものがある（Ｄ３・Ｄ５）。

平安時代

竪穴住居址５棟、掘立柱建物址６棟がある。遺物を伴わないため掘立柱建物址の帰属する時代は明らかではないが、ほぼこの時代のものと見られる。

５棟の竪穴住居址は平安時代の土器を伴っているが、大きくは二時期に分けられる。

年代	当遺跡	栗毛坂Ｂ地区遺跡　各段階の特徴			
		段階	灰釉陶器	甕類・杯類	
875	13･17号住	８期	光ヶ丘１号	「コ」の字形武蔵甕 ロクロ甕	須恵杯・黒色処理杯
900		９期	光ヶ丘１号	「コ」の字形武蔵甕退化	須恵器杯最後
			大原２号	羽釜の出現	
		10期	大原２号		
		11期			土師質食器６割占める
		12期	虎渓山１号	羽釜の胎土粗雑化 鍔から口縁部短小化	椀は深椀中心
1000		13期	虎渓山１号		
		14期			土師質小皿出現
	第12号住	15期	丸石２号		
	第14号住	16期		甕ナデ調整	
	第16号住			羽釜の器厚厚くなり、粗雑な胎土	
1100		17期	山茶碗	器種の減少	

表は近接地の栗毛坂遺跡群の土器の編年から抽出したものである。当遺跡の土器群を照合してみると９世紀第四四半期と11世紀後半という年代観が得られた。

竪穴住居址の形態については「Ｎ２東西型」の北カマド２本主柱穴（第13住）、「ＳＷ４中型」の南東隅カマドで竪穴の中に４本主柱穴（第12住、南の主柱穴はやや南寄りになっている）、「ＳＷ４南」の南東カマドで４本主柱穴、南の柱穴が南壁にあるもの（第14住）、「Ｓ０型」南カマドで主柱穴のはっきりしないもの（第15住）、「ＳＷ０型」南西カマドで主柱穴のはっきりしないもの（第16住）がある。「Ｓ０」．「ＳＷ０」は、浅く主柱穴が明確でない点が特徴である。ただし、「Ｓ０」型の総柱配列の浅い不規則な穴を柱穴とすれば平地式の住居であるかもしれない。規模を松本市内の資料と比較してみると（1990、望月）、第13号住居址4.1m四方は９世紀代では多くあるもので標準的規模である。11世紀代の第12号住居址の６m四方は大型の住居址に分類され、第14号住居址はやや長方形になり、4.0mはこの期に多くある標準的規模の住居址である。竪穴の掘り方は、第13号住居址が中央部が高く、その周辺の低いものである。時代の下る住居址は、貼り床が薄く全体がほぼ均一に掘り下げられるパターンである。叩き締められ非常に堅い床面であった。

掘立柱建物址は、遺物を伴わないことから時代については推測の域をでない。しかし、規模や覆土からほぼ平安時代に構築されたものと思われる。規模は異なるが１間×１間が２棟、２間×２間が３棟、２間×１間が１棟である。いずれも大規模なものではない。

引用参考文献

1　小平和夫1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－松本市内その１－総論編』第３章第５節古代の土器

2　望月　映1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－松本市内その１－総論編』第３章第１節古代の竪穴

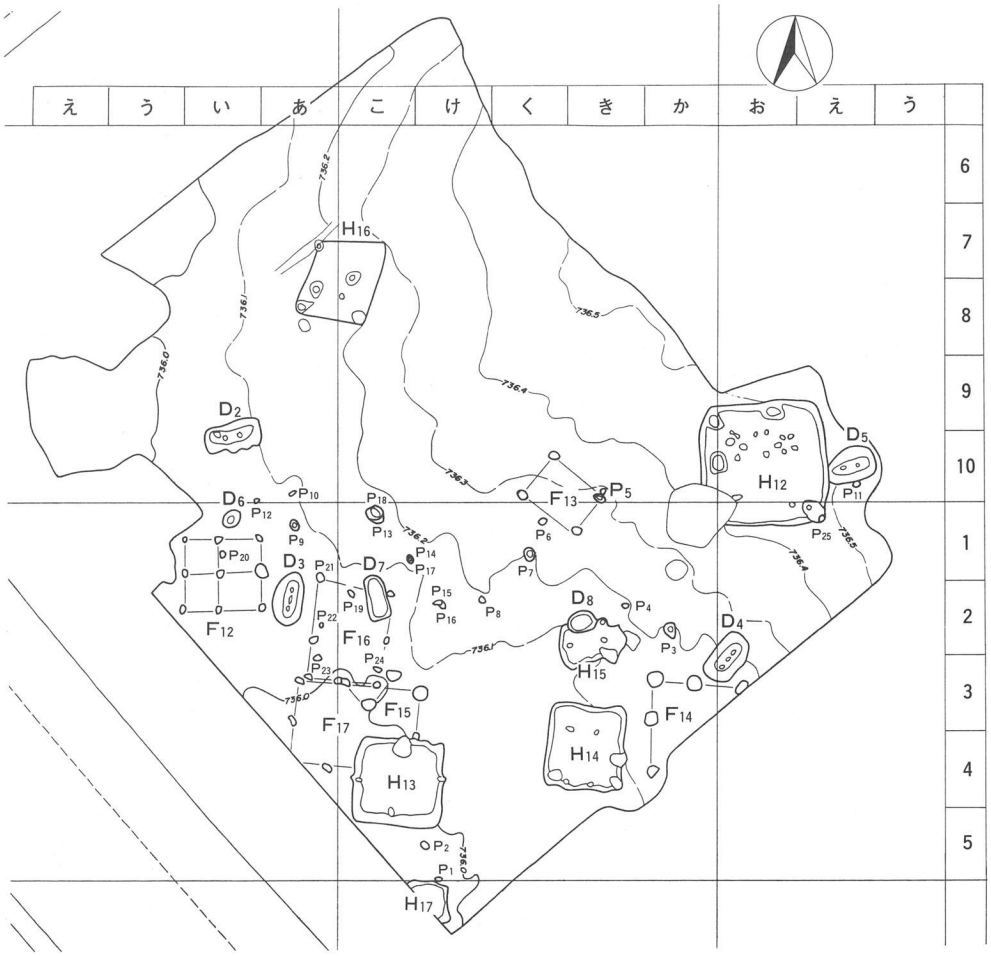
3　寺島俊郎1991『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２－佐久市内その２－』第３章第21節４遺構と遺物　２号住居址，第18節１～３

4　原　明芳1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２　吉田川西遺跡』第７章第２節「吉田川西遺跡における食器の変容」

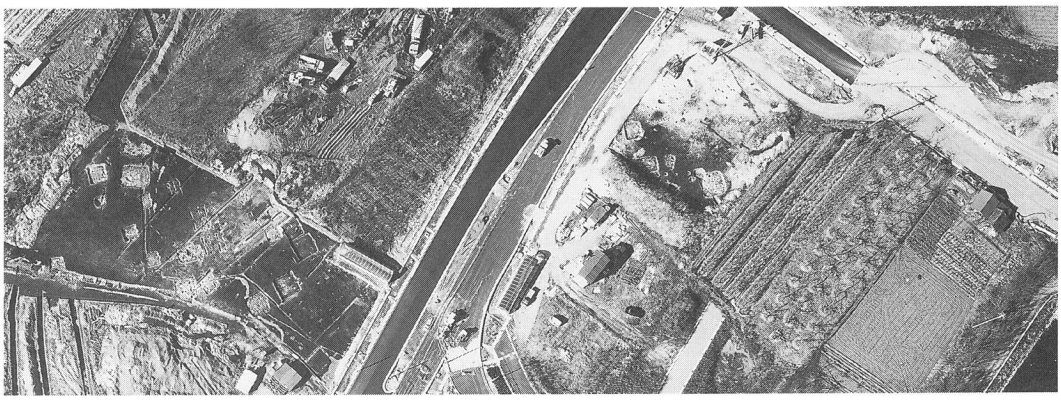
5　堤　隆1989『根岸遺跡』「根岸遺跡における土器様相」

6　堤　隆1985『聖原遺跡』第Ⅱ章聖原Ⅱ遺跡の環境

7　㈶東京都埋蔵文化財センター1987『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度（第２分冊）「№386遺跡」



第32図　上久保田向遺跡Ⅳ地区全測図（1：400）（朝日航洋社作製）



写25　上久保田向遺跡Ⅳ地区航空写真（朝日航洋社撮影）
（右上が本遺跡、左下はⅢ地区（おぎのや）の調査区である。）

上久保田向遺跡Ⅳ地区遺構一覧表
竪穴住居址

地区	遺構名	規模 長軸×短軸×深さ	面積	形態	主軸方位	竈の位置	主柱・他	床面の状況	覆土	備考
Ⅳ区	H12	6.0×6.0×0.1m		隅丸方形	N－0°	南東	4、他2 掘り方9	堅緻、焼けた範囲8	2層自然	土坑3
	H13	4.1×4.1×0.54m		方形	N－0°	北	2、出入口2	堅緻	4層自然	灰落1
	H14	4.0×3.6×0.08m		長方形	N－5°－E	南東	4、	堅緻、焼けた範囲2	2層自然	土坑1
	H15	3.2×1.7×0m		長方形	N－85°－E	南	ピット7	一部叩き面あり		規模形態不明確
	H16	4.2×3.2×0m		長方形	N－13°－E	南西		一部叩き面あり		土坑3
	H17	3.4×3.1×0.44m		方形	N－0°			軟質	3層自然	県2号住

掘立柱建物址

地区	遺構名	規模 間数	様式	桁行き×梁行き	本数	ピット規模	ピット形態	主軸方位	覆土	備考
Ⅳ区	F12	2×2	総柱	4.0×3.7m	9	径30～50㎝	円形	N－0°	2層	
	F13	1×1	側柱	3.3×2.6m	4	長径35～40㎝	楕円形	N－35°－W	1層	
	F14	2×2	側柱	5.0×4.5m	5	径60㎝	円形	N－90°	3層	半域のみ調査
	F15	1×1	側柱	2.0×1.6m	3	径50㎝	円形		2層	
	F16	2×1	側柱	5.2×3.8m	6	長径30～40㎝	楕円形	N－90°	6層	
	F17	2×2	側柱	6.4×4.6m	6	長径40～60㎝	楕円形	N－5°－W	3層	H13に切られる

土坑

地区	遺構名	規模 長径×短径×深さ	形態	覆土	備考
Ⅳ区	D2	2.9×1.5×0.55m	楕円形	4層	落し穴
	D3	2.6×1.8×0.69m	楕円形	4層	落し穴
	D4	2.7×1.5×0.72m	楕円形	4層	落し穴
	D5	2.7×1.5×0.65m	楕円形	4層	落し穴
	D6	0.9×0.3m	円形	2層	
	D7	2.2×1.0×0.2m	楕円形	1層	F16に伴うか
	D8	1.4×0.9×0.31m	楕円形	2層	H15に伴うか

上久保田向遺跡Ⅳ地区出土土器一覧表
Ｈ１２号住居址出土土器一覧表

番号	器種	法量 口径	器高	底径	器形の特徴	調整	備考
1	皿 灰釉	－	2	7	三日月形高台が付く。	外面　ロクロ横ナデ。底部は貼り付け高台。 内面　ロクロ横ナデ後口辺部灰釉を刷毛懸けか？	口縁部なし1／4残存。 色調7.5Y7／1灰白色 内面底、高台底部磨滅。
2	小皿 ハジシツ	8.6	1.8	4.8	小型品。杯下部が外湾し、上部内湾して立ち上がる。	ロクロ調整。底部回転糸切り。	ほぼ完存。 色調5YR5／6明赤褐色。 胎土細かい砂粒を小量含む。
3	小皿 ハジシツ	9.4	1.7	4.4	小型品。上げ底気味の底部から開いて内湾気味に立ち上がる。肉厚なつくりである。	ロクロ調整。底部回転糸切り。	約1／4残存。 色調5YR5／4にぶい赤褐色。 胎土細かい砂粒を小量含む。
4	小椀 ハジシツ	10.4	3.5	－	小型品。足高な高台が付くものと思われる。 杯部中位に外稜あり。	ロクロ調整。底部貼り付け高台。	約1／4残存 色調7.5YR5／3にぶい褐色。 胎土粉末質で細かい。
5	椀 ハジシツ	17	3.6	－	内湾気味に外に開く。	ロクロ調整。	口辺のみ1／3残存。 色調7.5YR6／4にぶい橙色。 胎土粉末質で細かい。
6	椀 ハジシツ	－	3.2	10	厚手。	ロクロ調整。底部貼り付け高台。	底部のみ1／4残存。色調7.5YR5／3にぶい褐色。 胎土粉末質で細かい。
7	羽釜	29	28.5	14	比較的薄手でしっかりしている。丸味のある底部から直線的に外傾している。	ナデ調整。鍔状の突帯を体部上寄りに付けている。	約1／4残存。底部なし。 色調7.5YR黒褐色。 胎土細かい砂粒含む。
8	羽釜	－	－	－	厚手。	ナデ調整。鍔状の突帯を口縁部直下に付けている。	一部残存のみ。 色調7.5YR3／1黒褐色。 胎土細かい砂粒含む。
9	羽釜	8.4	12.4	－	薄手。	ナデ調整。鍔状の突帯を体部上寄りに付けている。	約1／6残存。 色調5YR4／2灰褐色。 胎土細かい砂粒含む。

Ｈ１３号住居址出土土器一覧表

番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	器高	底径			
1	杯	14.7	4	7.6	比較的大きい。内湾して外傾し内面口縁上部に稜をなして、外反する。Ｐ１出土。	外面　ロクロ調整。底部手持ちヘラケズリ。 内面　ミガキ。黒色処理。	ほぼ完形。 色調10ＹＲ6／4にぶい黄橙色。 胎土細かい砂粒含む。
2	杯	13.9	4.3	6	口辺部内湾外傾。	外面　ロクロ調整。回転糸切り。 内面　ミガキ。黒色処理。	約1／3残存。 色調5ＹＲ4／4にぶい赤褐色。 胎土細かい砂粒含む。
3	杯	14.4	4.2	―	下部内湾、上部外反気味に開く。	外面　ロクロ調整。 内面　ミガキ。黒色処理。	口辺のみ1／3残存。 色調10ＹＲ6／3にぶい褐色。 胎土緻密まれに粗い。
4	杯	―	2.2	6.6	大振り。分厚い。	外面　ロクロ横ナデ。底部回転糸切り。 簀の目状の圧痕あり。 内面　ミガキ。黒色処理。	底部のみ残存。 色調10ＹＲ7／4にぶい黄橙。 胎土細かい砂粒を僅かに含む。
5	杯	―	2	6		外面　ロクロ調整。底部回転糸切り。 内面　ミガキ。黒色処理。	底部のみ残存。 色調5ＹＲ5／4にぶい赤褐色。 胎土粗い砂粒細かい砂粒含む。
6	椀	15.5	5.5	8	少し内湾気味に外傾。口縁外反。	外面　ロクロ調整。器面剝落。底部回転糸切り後貼り付け高台。 内面　ミガキ。黒色処理。	約1／3残存。 色調10ＹＲ2／3黒褐色土。 胎土細かい砂粒少し含む。
7	椀	14.6	5.2	―	口縁端部外反する。	外面　ロクロ調整。 内面　ミガキ。黒色処理。	口辺部1／4残存。 色調5ＹＲ5／6明赤褐色。 胎土粗い砂粒細かい砂粒含む。
8	椀	―	2.7	7.6	杯部浅く開く。高台が付くが足高ではない。	外面　ロクロ調整。底部回転糸切り後貼り付け高台。 内面　ミガキ。黒色処理。	下部のみ残存。 色調7.5ＹＲ6／6橙。 胎土細かい砂粒僅かに含む。
9	皿	13	3.2	6.2	扁平で直線的に開く。	外面　ロクロ調整。貼り付け高台。 内面　ミガキ。黒色処理。	ほぼ完形。「万」の墨書。 色調7.5ＹＲ5／4にぶい褐色。 胎土ごく細かい砂粒含む。
10	皿	13.4	2.1	―	灰釉陶器の段皿に似て、杯部に段を持って開く。	外面　ロクロ調整。化粧ナデ雑。底部回転糸切り後貼り付け高台。「？」の墨書あり。 内面　ミガキ。黒色処理。	高台部欠損。掘り方出土。 色調7.5ＹＲ6／4にぶい橙色。 胎土まれに粗い砂粒含む。
11	皿	13.2	2.2	―	杯部直線的に開き口縁外反気味。	外面　ロクロ調整。 内面　ミガキ。黒色処理。	口辺のみ1／4残存。 色調7.5ＹＲ6／4にぶい橙色。 胎土粗い砂粒含む。
12	杯 軟須	14	3.7	6.9	ほぼ直線的に外傾する。	外面　ロクロ調整。底部回転糸切り。 内面　ロクロ調整。	約1／2残存。 色調7.5ＹＲ5／4にぶい褐色。 胎土粗い砂粒含む。
13	杯 軟須	13.6	4.2	5.3	小さい底部から内湾して開き、口縁部で外反する。	外面　ロクロ調整。底部回転糸切り後、「×」のヘラ描きあり。 内面　ロクロ調整。	ほぼ完存。 色調5Ｙ6／1灰色。 胎土粗いの小量細かい砂粒含む。
14	甕	23.2	17.2	―	「コ」字口縁の折れが強く、端部内湾気味。薄手の胴部は扁平にふくらむ。「武蔵型甕」	外面　口辺部横ナデ。胴部ヘラケズリ。 内面　口辺部横ナデ。胴部ナデ。	口～胴部1／4残存。 色調7.5ＹＲ4／4褐色。黒色。 胎土細かい砂粒含む。
15	甕	28	16	―	「コ」字口縁14ほど折れない。「武蔵型甕」。	外面　口辺部横ナデ。胴部ヘラケズリ。 口辺直立部のナデあまい。 内面　口辺部横ナデ。胴部ナデ。	口～胴部1／4残存。 色調2.5ＹＲ5／4にぶい赤褐色。 胎土細かい砂粒含む。
16	甕	20.4	9.3	―	「コ」字口縁14ほど折れない。「武蔵型甕」。	外面　口辺部横ナデ。胴部ヘラケズリ。 口辺直立部のナデあまい。 内面　口辺部横ナデ。胴部ナデ。	口～胴部1／4残存。 色調5ＹＲ4／8赤褐色。 胎土細かい砂粒含む。
17	甕	17.6	15.8	―	「コ」字口縁。胴上部が扁球形に膨らむ。台付きか？	外面　口辺部横ナデ。胴部ヘラケズリ。 口辺直立部のナデあまい。 内面　口辺部横ナデ。胴部ナデ。	口～胴部1／4残存。 色調5ＹＲ4／8赤褐色。スス付着。 胎土細かい砂粒含む。
18	甕	―	4.5	9	「武蔵型甕」。底径が大きい。	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	底部のみ1／3残存。 色調5ＹＲ5／6明赤褐色 胎土細かい砂粒含む。
19	甕	―	10.7	3	「武蔵型甕」。膨らみをもって小さい底部にすぼまる。	外面　ヘラケズリ。 内面　ナデ。	胴下部残存。 色調5ＹＲ5／3にぶい赤褐色。 胎土細かい砂粒含む。
20	柱状 高台	―	1.2	4.5		ロクロ調整。底部回転糸切り。	台部のみ残存。 色調7.5ＹＲ5／4にぶい赤褐色。 胎土まれに細かい砂粒含む。
21	横瓶 須恵	―	14.2	6.2		外面　平行格子タタキ。底部ヘラヨコナデ。 内面　ナデ。	胴部のみ残存。 色調Ｎ4／0灰色。外面自然釉 胎土粗い白色粒ふくむ。

Ｈ１４号住居址出土土器一覧表

番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	器高	底径			
1	小皿 ハジシツ	10	1.8	―	内湾して開く小皿。	ロクロ調整。	約2／3残存 色調7.5ＹＲ6／6橙色。 胎土細密土。
2	椀 ハジシツ	15.5	5.3	7.8	口辺部内湾外傾。	ロクロ調整。	約1／2残存。 色調7.5ＹＲ6／6橙色。 胎土細密土。
3	甕	―	―	―	口縁部短く折れる。	外面　ナデ。 内面　口辺部横ナデ。胴部刷毛目状ナデ。	口辺部破片。 色調5ＹＲ4／3にぶい赤褐色。 胎土細かい石英粒含む。

Ｈ１６号住居址出土土器一覧表

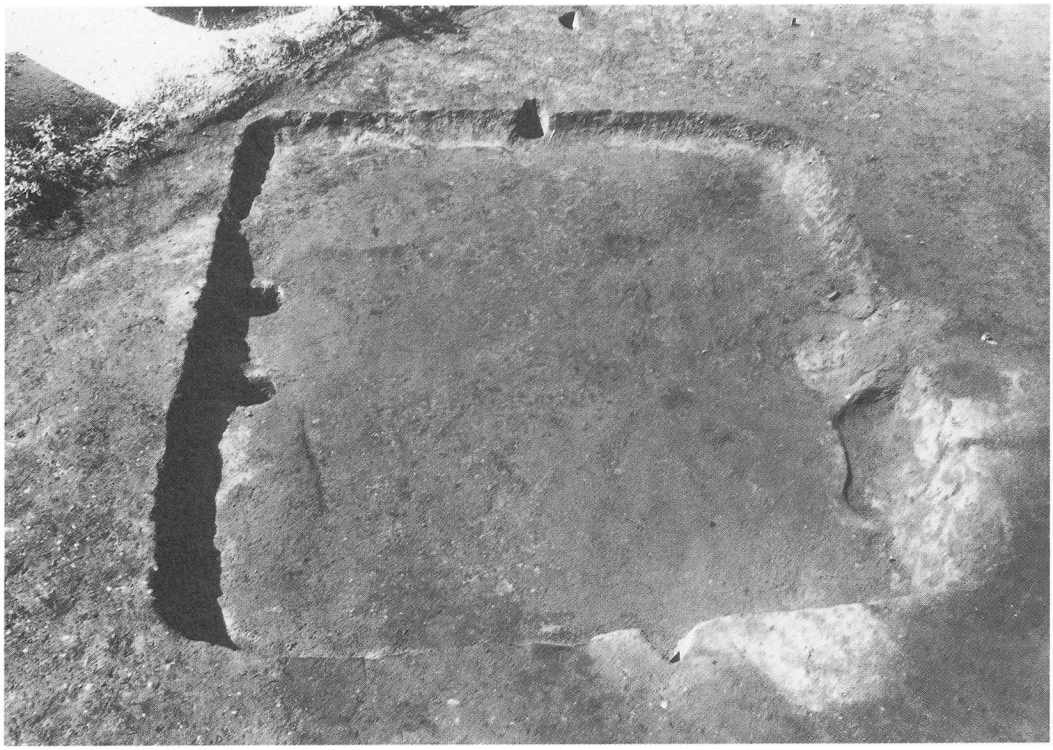
番号	器種	法量			器形の特徴	調整	備考
		口径	器高	底径			
1	小皿 ハジシツ	9.4	1.8	5	内湾して開き端部外反気味な小皿。	ロクロ調整。 底部回転糸切り	約2／3残存。 色調7.5ＹＲ6／6橙色。 胎土細密土。
2	小皿 ハジシツ	8.8	2	4	内湾して開き端部外反気味な小皿。	ロクロ調整。 底部回転糸切り	約1／2残存。 色調7.5ＹＲ6／6橙色。 胎土細密土。
3	杯 ハジシツ	―	1.7	6	下部内湾。	ロクロ調整。 底部回転糸切り	底部破片。 色調10ＹＲ6／4にぶい黄橙色。 胎土細密土。

上久保田向遺跡Ⅳ地区ピット一覧表

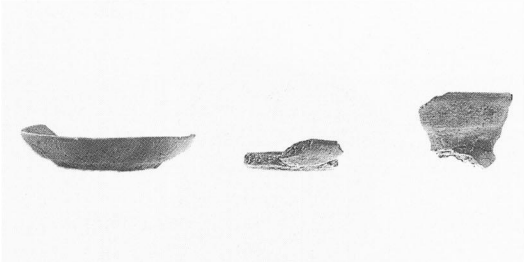
地区	遺構名	出土位置	規模 長径×短径×深さcm	平面形	覆土
Ⅳ区	P 1	け－5G	43×34×39	楕円形	1．10YR2／2ローム粒子 パミス粒少し含む
	P 2	け－5G	18×16×26	隅丸三角形	1．10YR2／3パミス粒含む 2．10YR3／2ローム粒含む
	P 3	か－2G	68×62×43	楕円形	1．10YR1.7／1大パミス含む 細かいのも
	P 4	き－2G	47×48×17	円形	1．10YR1.7／1細かいパミス含む 2．10YR2／3
	P 5	き－10G	24×23×21	円形	1．10YR1.7／1と2／3の緻密土混 2．10YR5／8黄褐色ローム
	P 6	く－1G	38×37×11	円形	1．10YR2／2パミス細粒含む
	P 7	く－1G	53×48×18	円形	1．10YR1.7／1パミス大小含む 2．10YR2／3パミス大小含む
	P 8	け－2G	39×34×55	隅丸三角形	1． 2．P5に同じ
	P 9	あ－1G	48×44×72.5	円形	1．10YR2／2パミス、ロームまれに含む、少々しまりあり 2．10YR5／6黄褐色ロームに黒色含む 3．柱痕10YR4／4フカフカ
	P10	あ－10G	32×25×21	楕円形	1．10YR2／3 2．10YR5／8
	P11	え－10G	38×26×31	楕円形	1．1.7／1緻密な黒色土
	P12	い－10G	32×30×20	円形	1．10YR2／2しまりなし、ローム粒子含む
	P13	こ－1G	68×55×9	楕円形	1．10YR2／1黒色土
	P14	け－1G	54×41×34	楕円形	1．10YR2／2黒褐色土
	P15	け－2G	47×38×21	隅丸三角形	1．10YR2／1黒色土
	P16	け－2G	30×－×17		1．黒褐色土（10YR2／2）パミス細・大両者含む P－15に切られる
	P17	け－1G	40×－×－	不明	1．黒褐色土（10YR2／2）パミス細・大両者含む P－14に切られる
	P18	こ－1G	72×60×50	楕円形	1．黒褐色土（10YR2／2）パミス細・大両者含む P－13に切られる
	P19	こ－2G	38×34×38	楕円形	1．黒褐色土10YR2／2ローム細かいの少々、緻密土 2．黄褐色ロームに黒色土含む
	P20	い－1G	40×36×19	楕円形	1．黒褐色土（10YR2／2）黒色土にローム粉子を多く含むフカフカ 2．暗褐色土（10YR3／3）ローム粉子多く含むフカフカ
	P21	あ－1G	20×20×25	円形	不明　F16のPitを切る
	P22	あ－2G	30×30×19	円形	1．暗褐色土（10YR3／3）まれにパミス粒含む 2．暗褐色土（10YR4／4）ロームパミス含む 3．黄褐色（10YR5／6）
	P23	あ－3G	40×30×20	楕円形	1．暗褐色土（10YR3／3）まれにパミス粒含む
	P24	こ－3G	46×20×28	ひょうたん形	1．暗褐色土（10YR3／3）まれにパミス粒含む 2．暗褐色土（10YR4／4）ロームパミス含む
	P25	え－1G	32×24×32	楕円形	1．黒褐色土（10YR2／3）ローム・パミス含む 2．明黄褐色（10YR6／6）ロームに黒色土含む

図版一

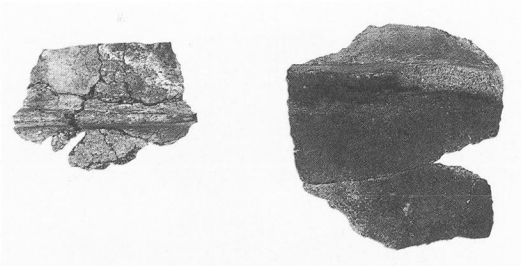
1．第12号住居址全景（西方より）



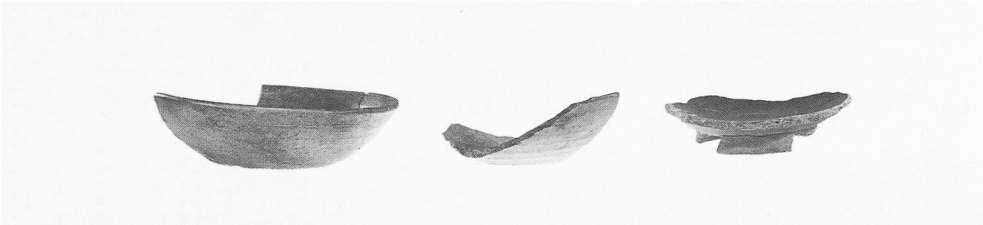
2．第13号住居址全景（東方より）



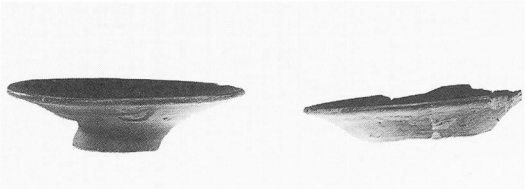
H12，6－2・3・4小皿・小椀



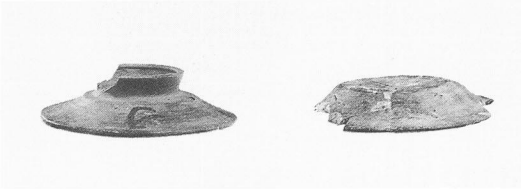
H12，6－7・8羽釜



H13，10－1・2・8杯・椀

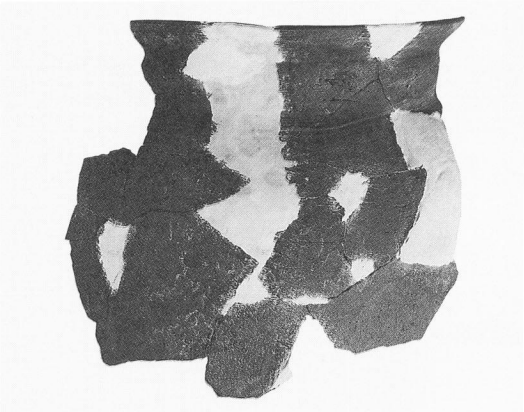


H13，10－9・10皿

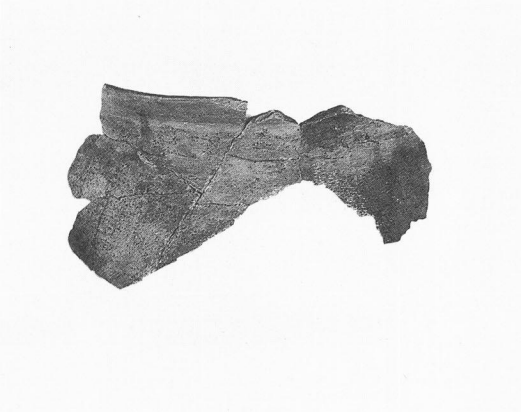


H13，10－9・10皿表の墨書

H13，10－12・13須恵杯



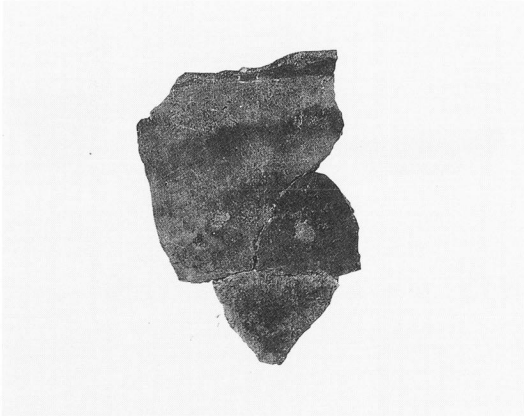
H13，10－15甕



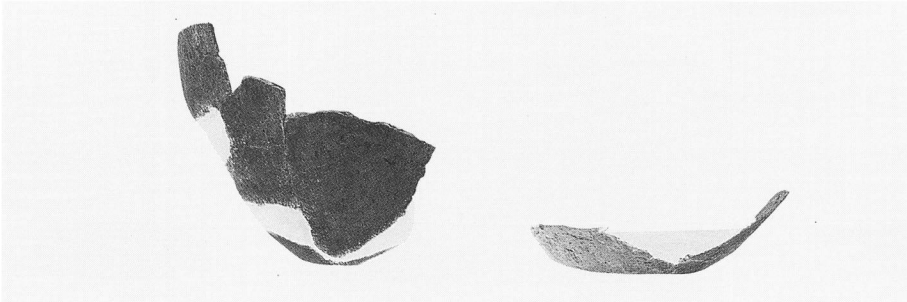
H13，10－16甕

図版三

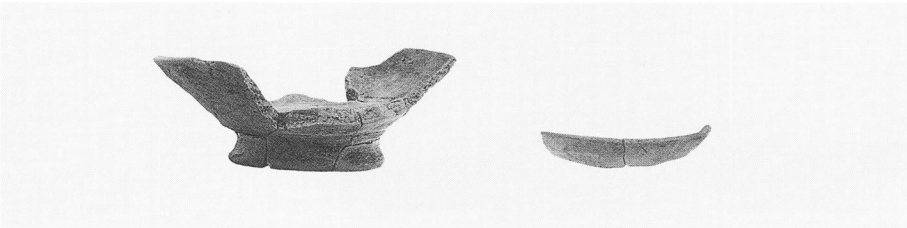
H13，10—17甕



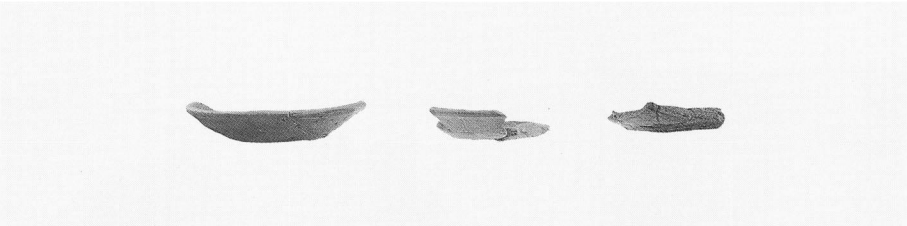
H14，14—３甕



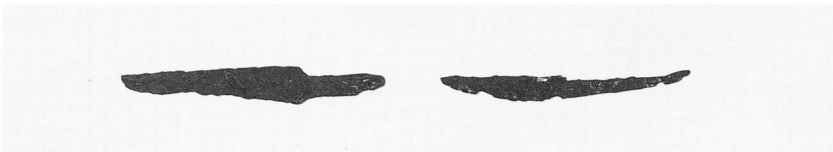
H13，11—19・18甕底部



H14，14—２・１椀・小皿



H16，17—１・２・３小皿



H12，７—１・２刀子

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第１集　『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第３集　『石附窯址群Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第４集　『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第５集　『立科Ｆ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第６集　『上曽根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第７集　『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第８集　『瀧の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第９集　『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第11集　『赤座垣外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第13集　『上高山遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第14集　『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第15集　『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第16集　『石並城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第17集　『市内遺跡1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第18集　『西曽根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第19集　『上芝宮遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第20集　『下聖端Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第21集　『金井城跡Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第24集　『上聖端遺跡』

長野県佐久市
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第25集
枇杷坂遺跡群
上久保田向Ⅳ発掘調査報告書
1994年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
印　刷　所　㈱　中　信　社